金沢市犀川鉄橋遺跡第1·2次 発掘調査報告書

犀川環境整備事業関係埋蔵文化財 発掘調査報告書第1集

1982.3

石川県立埋蔵文化財センター

金沢市犀川鉄橋遺跡第1·2次 発掘調査報告書

犀川環境整備事業関係埋蔵文化財 発掘調查報告書第1集

1982.3

石川県立埋蔵文化財センター

- 1. 本書は、県立埋蔵文化財センターが、犀川環境整備事業に先だち昭和54年度(第1次)、同56年度(第2次)に発掘調査を実施した金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書で、犀川環境整備事業関係埋蔵文化財調査報告書の第1集である。
- 2. 調査期間 第1次調査 昭和54年8月1日~同年8月20日 第2次調査 昭和56年7月30日~同年8月21日
- 3. 調査指導員 高堀勝喜 (石川考古学研究会々長) 荒木繁行 (石川考古学研究会副会長)
- 4. 調査員 第1次調査 平田 天秋(県立埋蔵文化財センター主事)現在、同センター 保存技術係長

端野 英子 (県立埋蔵文化財センター主事) 昭和 54 年 9月退職 西野 秀和 (県立埋蔵文化財センター嘱託) 現在、同センター 主事

上庄由美子(石川考古学研究会々員)現在、石川県埋蔵文化財協会職員

第2次調査 三浦 純夫 (県立埋蔵文化財センター主事)

米沢 義光(県立埋蔵文化財センター主事)

芝田 悟(県立埋蔵文化財センター技師)

山川 正一 (宇ノ気町教育委員会嘱託) 昭和 56年度県立埋蔵文 化財センター長期研修生

- 5. 調査協力 現場での発掘調査には、県土木部河川課、金沢土木事務所、大和紡績株式 会社金沢工場の諸機関および金沢市田中町、戸水町、大友町、南新保町、畝 田町、藤江町、岩出町、疋田町、河北郡宇ノ気町在住の方々の協力を得た。
- 6. 遺物整理にあたり高堀勝喜 (石川考古学研究会々長)、小島俊彰 (金沢美術工芸大学助 教授)、福田弘光 (石川考古学研究会々員) の各位から御教示を賜った。
- 7. 出土品の整理は、石川県埋蔵文化財協会に一部を委託し、残りを平田天秋、芝田 悟、 三浦純夫、米沢義光、山川正一で行なった。
- 8. 本書の編集は平田と米沢が協議し、写真撮影、執筆は次の如く分担した。尚、執筆するにあたり、県立埋文センター橋本澄夫次長以下同センター職員から教示を得た。

平田 第II章第II節、第IV章第I 節(2)、(3) 第V章(2)、(4) 付章II周辺の遺跡② 芝田 付章II周辺の遺跡①

米沢 第 I 章、第 II 章第 I 節、第 III 節、第 III 章、第 IV 章第 I 節 (1)、同第 II \sim IV 節 第 V 章 (1)、(3)、(4) 付章 I

- 9. 本書の遺物の縮尺は、土器・石器・木製品は $\frac{1}{3}$ であるが、木製品の一部は $\frac{1}{6}$ のものもある。
- 10. 方向は磁北を表わす。
- 11. 本文中の文章表現は各執筆者の自主性を尊重し、あえて統一はとらなかった。

目 次

例		言	
第	I	章	遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第	II	章	調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	第	I節	□ 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	第	預II	5 第1次調査の概要(調査日誌抄)
	第	預III	i 第2次調査の概要(調査日誌抄)
第	III	章	遺構と層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第	IV	章	遺 物
	第	II	i 土 器·······
		(1) 縄文土器······
		(2) 土師器
		(3) 須恵器
	第	領 II 說	· 石器···································
	第	預III	i 木製品····································
	第	道VI	
	第	V質	5 古 銭
第	V	章	まとめ
付	章	Ī	金沢市立泉中学校保管犀川鉄橋遺跡採集土器
付	章	ΙΙ	周辺の遺跡① 増泉穴田遺跡採集土器について
			周辺の遺跡② 増泉遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
写	真図	版 1	~21

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置図(昭和 56 年)
第2図	遺跡の位置図(明治 43 年) 3
第3図	調査区の位置図(第1・2次)・・・・・・・・・・7
第4図	第 2 次調査区の状況・・・・・・・11
第5図	第2次調査区第1号トレンチ北壁土層図11
第6図	縄文土器実測図16
第7図	縄文土器実測図・・・・・・・19
第8図	縄文土器実測図21
第9図	縄文土器実測図23
第10図	縄文土器実測図24
第11図	土師器実測図26
第12図	土師器実測図・・・・・・29
第13図	土師器実測図・・・・・・・33
第14図	土師器実測図・・・・・・・35
第15図	須恵器実測図37
第16図	石器実測図39
第17図	木製品実測図40
第18図	木製品・古銭実測図41
第19図	犀川鉄橋遺跡出土々器実測図(金沢市立泉中学校保管分)49
第20図	犀川鉄橋遺跡出土々器実測図(金沢市立泉中学校保管分)51
第21図	犀川鉄橋遺跡出土々器実測図(金沢市立泉中学校保管分)52
第22図	増泉穴田遺跡出土々器実測図57
第23図	增泉遺跡出土々器実測図60
	表 目 次
第1表	周辺の遺跡地名表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第2表	金沢周辺の土器編年案55

第 I 章 遺跡の位置と環境

犀川鉄橋遺跡は、国鉄北陸本線犀川鉄橋から北安江八日市線の大豆田大橋にかけての河原一帯 に拡がっている。行政区画では、金沢市大豆田本町から本江町にまたがっている。

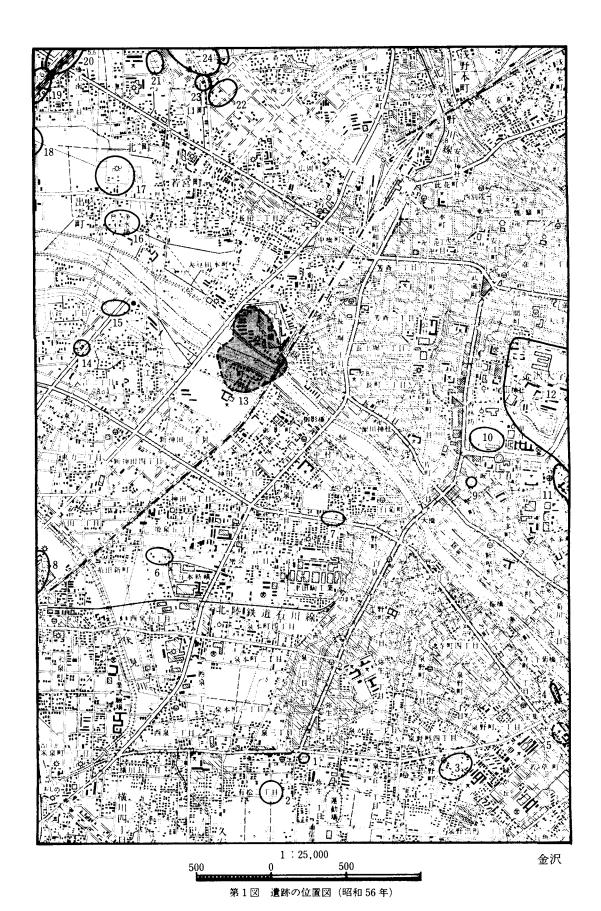
遺跡の位置を巨視的に観ると、犀川がその侵食作用で形成した河岸段丘部(洪積台地)から冲積作用で形成された平野部へ抜けようとする地点で、海抜約6~7mの高さを測る。このあたりは、洪積台地から冲積平地に変化する所で、国鉄北陸本線に添って自然湧水の清水があり、犀川右岸から左岸にかけて(北から南へ)梅鉢清水、御供田清水、御花清水、衣装田清水と呼ばれている。

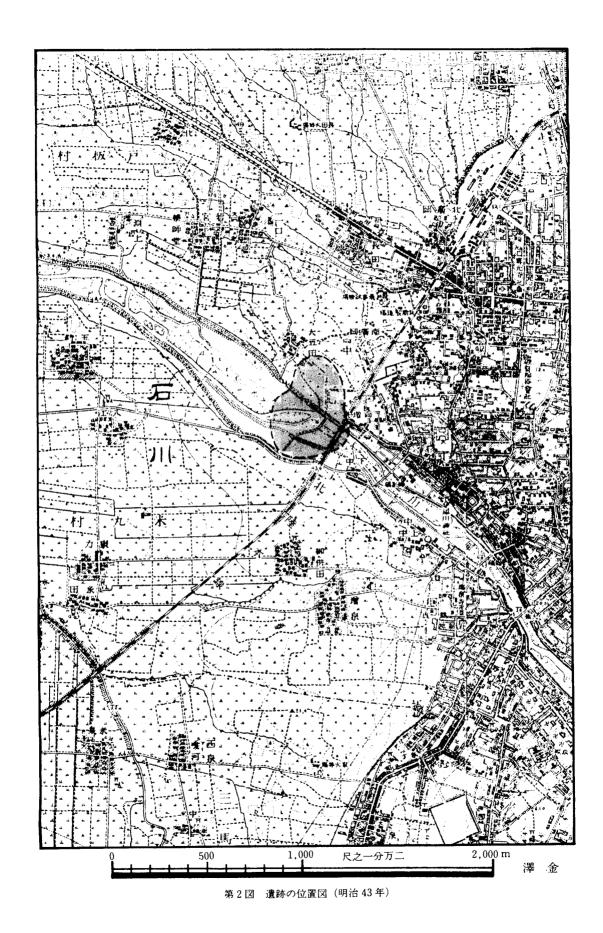
この犀川周辺の景観の変遷を辿るための参考に、今 (昭和 56 年) から約 70 年前にあたる、明治 43 年に陸地測量部が作成した地図と現在の地図とを比較してみたい。犀川は、現在の地を流れているが、堤防の状態に違いがある。右岸側は、直線的であるが、左岸側は、南側へ大きく突出するように湾曲し、(この部分の川幅は、約 250~400 m を測る。)堤防も二重にめぐらされる霞堤と呼ばれるものである。流路も鉄橋までは右岸側を、これを越えると左岸側へと向っている(註1)。鉄橋のすぐ下流には、川を渡る道路と橋が架けられている。河原内には養蚕のための桑畑も作られている。特に戦前には、元の県立中央病院あたりに石川県養蚕学校があり、このまわりの犀川の河原には、桑畑があたり一面に拡がっていたという。旧市街地から北陸本線までは、家屋が続いているが、これより下流側の平野部に至ると、集落が所々に点在する以外、一面の水田地帯となっている。

近年流域周辺は、都市化の波にのり工場や住宅が建ち並び、昔日の面影を追うことも難しくなってきている。明治の文豪室生犀星が「美しき川は流れたり」とうたった犀川も、時代の移り変りとともにその姿を変えつつある。

この地域の歴史的変遷を観れば、犀川と深い関係があるものとみられる。市街地から上流域では、犀川を眼下に望む山地や段丘上で、縄文時代の遺跡が多く確認されている。市街地から下流域の平野部には、縄文時代の遺跡のみならず、新たに水稲耕作を生産基盤とする弥生・古墳時代以降の遺跡が数多く存在している。上流域の縄文時代の遺跡の発見には、石川考古学研究会々員の踏査に負う所が大きい。中でも故沼田啓太郎石川考古学研究会副会長をはじめとし、同会員浅井勝郎、岡本晃、河村義一の各氏の永年にわたる調査研究活動による所が大きく、その得られた成果には重要なものが多い。

本遺跡を含めて犀川流域でその最古のものは、縄文時代早期のものとされる。それは金沢市天 池遺跡である。同遺跡の調査では、ピット群、礫群の遺構に加えて、関東地方の早期田戸下層式 に比定される土器群と石器が検出されている。前期では先の天池遺跡からほど近い中戸遺跡が知 られている(註3)。同遺跡からは、関東地方の前期諸磯C式や鍋屋町式の影響を有する土器群が





目を犀川下流域に転ずれば、中期中葉の古府式のタイプサイトである古府遺跡や、同中期後葉の北塚A遺跡が、後晩期では晩期中屋式の松村A遺跡が知られている。

弥生時代以降になると犀川の冲積作用で形成された平野部に、遺跡数が確実に増加して行く。 それは稲作の伝播により、平野部でも低湿地とこの周辺の自然堤防に水田と集落が設定されたことによる。この時期の遺跡には、寺中A遺跡、畝田遺跡、戸水B遺跡、藤江B遺跡、松村B遺跡等が存在する。

古墳時代以降では、伏見川、十人川、犀川の合流点近くに位置する古府クルビ遺跡や高畠遺跡がある。他に薬師堂遺跡、玉鉾遺跡、増泉穴田遺跡が存在する。奈良・平安時代では玉鉾B遺跡、増泉遺跡が、中世では若宮遺跡が存在している。

第1表 周辺の遺跡地名表

①有松 B遺跡(縄文)、②有松 D遺跡(古墳)、③泉野遺跡(縄文)、④法島遺跡(縄文)、⑤十一屋町遺跡(縄文)、⑥増泉穴田遺跡(古墳)、⑦増泉遺跡(平安)、⑧金沢専売公社工場遺跡(奈良、平安)、⑨堅町遺跡(縄文)、⑩広坂遺跡(平安)、⑪本多屋敷遺跡(近世)、⑫金沢城跡(安土桃山~江戸)、⑬犀川鉄橋遺跡(縄文、古墳)、⑭玉鉾遺跡(古墳)、⑮玉鉾 B遺跡(奈良~平安)、⑯若宮遺跡(室町)、⑰薬師堂遺跡(古墳)、⑱出雲ジイサマダ遺跡(平安)、⑪藤江 A遺跡(平安)、⑩藤江 B遺跡(弥生、古墳、奈良、平安)、⑪二口ロクチョウ A遺跡(古墳)、⑫二口シミズ遺跡(古墳)、②西念クボ遺跡(縄文、古墳)、②西念ネジタ遺跡(弥生)

註1 この流路の右岸側から左岸側への変化は、右岸側の第1・2調査地で遺物を含んだ粘質土層のレベルが、約7mの高さで微高地状となっている。これに対し左岸側は、現地表面より約1.5~2m下から青灰色粘質土層を検出している。つまり右岸側が高く左岸側が低く、川はこの低い方を流れているのであろう。

参考文献

浅香年木他『角川日本地名大辞典 17 石川県』角川書店 昭和56年 日置 謙 『加能郷土辞彙』北国出版社、昭和54年復刻二版

第Ⅱ章 調査に至る経緯

第 I 節 調査に至る経緯

犀川鉄橋遺跡の調査は、犀川環境整備事業に伴なう緊急発掘調査である。

本遺跡が所在する犀川は、金沢市南東部と石川郡河内村の境界に聳える奥三方山に源を発し、金沢市街地を南東から北西方向に横切り、金沢市金石地内で日本海に注いでいる。流長 41.7 km を測り、県内では白山山麓に源を発する手取川の 65.65 km に次ぐものである。昭和 40 年に上流の二又新町地内に犀川ダムが、また同 49 年には、その支流の内川に内川ダムが築かれ、市民の上水道の水源になると伴に洪水調節の機能を担っている。これらのダムの設置と、市街地より下流での、堤防の護岸整備の強化により、市民は洪水の不安から解消されたのである。

しかし、明治時代に著された皇国地誌によれば、「水清くして淡、急流にして、舟筏通せず水路常に蛇行の如く、其際皆砂礫なり。烈風霖雨の時は洪水河身に満ち間に沼地を損害することあり。」と、記される如く、暴れ川であった。中流域にあたる金沢市街地部分では、川底は浅くまた、堤防も低い状態であったため、一度大雨となれば水は堤防を越え、市街地にあふれ出し、架けられていた橋もその濁流の勢いで、橋桁もろとも流失する事が度々であった。さらに現在の金沢市大豆田本町地内より下流は、流路が大きく蛇行し、大雨の度に堤防が決壊し、流域の農民に多大な被害を与えてきた。流路周辺には低湿地が拡がり、度々冠水する常習地帯となり、葭の繁茂する遊水池の状況を呈し、半ば放置されていたと推定される。このため流域農民にとっては、農作業に多くの時間と労力の投入を余儀なくされ、水との壮絶な闘いを続けてきたといっても過言ではない。

だが近世に至って、加賀藩がいくつかの事由で、治水技術の導入を積極的に図るようになるのである。それらは、流域農民からの貢納の安定確保と田畠の整備、及び新田開発による増収を計る等の経済的側面と、城下町の町並みの整備に伴う流路の付け替えである。前者にあっては、犀川の蛇行した流路の切替えや、犀川より取水する大野庄、鞍月用水に代表される灌漑用水の整備であった。後者にあっては、かつて犀川は河幅が広く、流路も本流と分流に分かれ、現在の香林坊あたりを分流が流れていたという。そして、この本流側に新たに堤防を築き、元河原であった所に町並みを作ったという。これが現在の片町付近にあたる。犀川の河幅を狭くした川除工事を伝える町名として、今も中川除町が残っている。

さらに先に述べた灌漑用水の整備も単に農業用水としての性格のみならず、城下町でも武家屋 敷地内を貫流している点から防衛、防火、雪害対策をも考慮したうえで配されたものといわれて いる。つまり犀川の流路の整備は、先述の水田、畑地の整備と城下町の町並み整備とが互いに、 密接な関係を有するとみてよかろう。

時代の流れとともに犀川の姿も変貌をとげた。昭和46年度から、犀川環境整備事業に伴う工

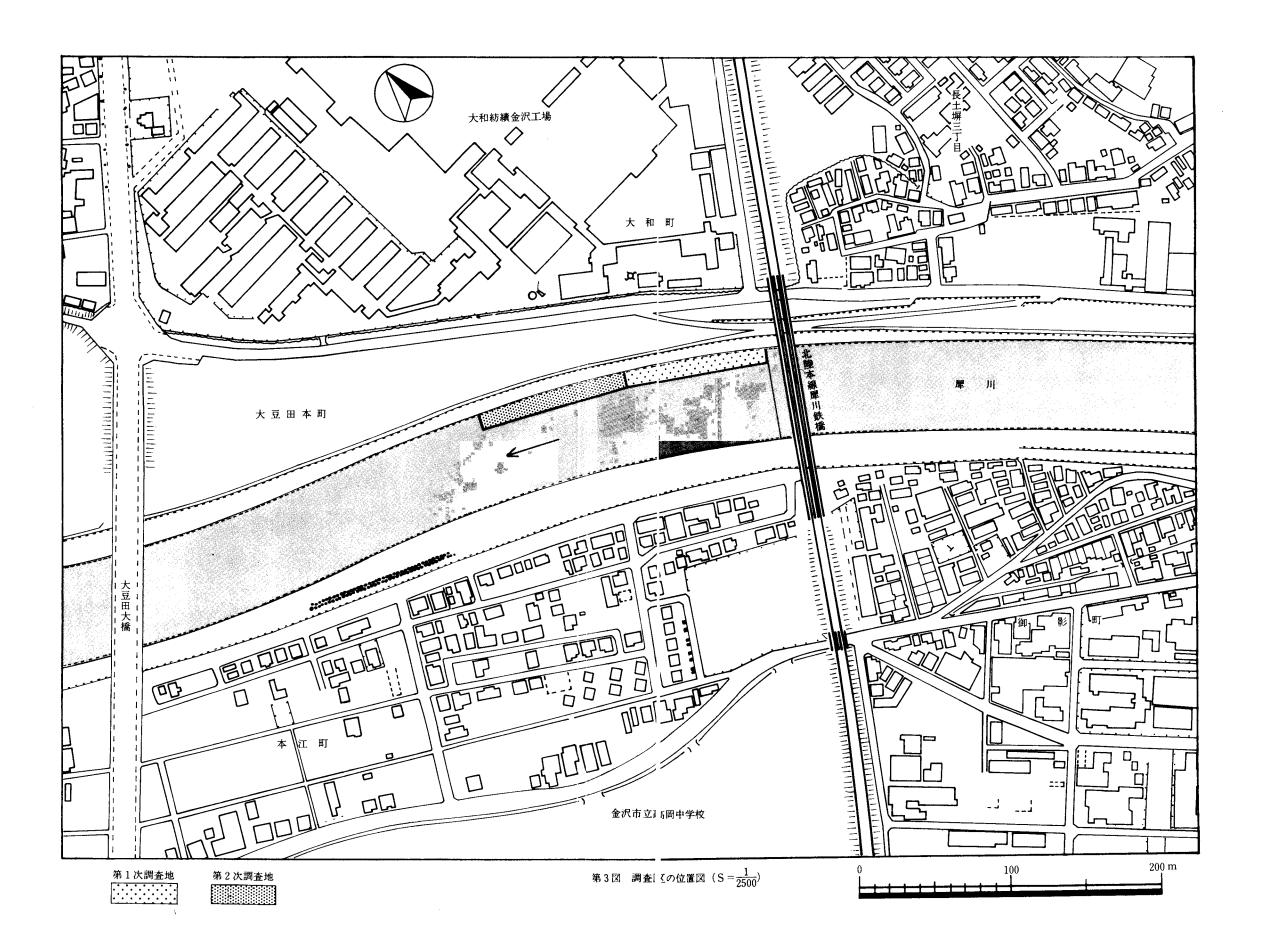
事が開始されたのである。市街地を流れる犀川の護岸、流路の整備と河川敷内に芝生で覆った緑地公園やサイクリング道路を作る工事として実施され、すでに上流から御影橋までの区間が完了している。新たに昭和53年度からは、御影橋―大豆田大橋間の工事が着工され、すでに御影橋から犀川鉄橋までも工事が完了している。この緑地公園は、広く一般市民のリクリェーション、あるいは憩いの場として活用されている。

さて、犀川鉄橋遺跡は、昭和 47 年夏、当時金沢市立泉中学校生徒の、田保博、浅井博幸、山崎修の三君によって発見された。それは犀川の河原に露出していた粘質土層から縄文土器を採集した事に端を発している。犀川の河原という特殊な場所からの発見であるため、当時の新聞紙上にも掲載された事を筆者も記憶している。発見場所は、本遺跡発見遺物の整理にあたったうちの一人である的場登君による『犀川鉄橋遺跡の研究―石川県の縄文晩期と比較して一』の中の略図を参考にすれば、大和紡績横の犀川右岸から中洲にかけてで、昭和 56 年度に県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施したあたりと推定される。採集された遺物は、縄文晩期の八日市新保式の土器片、数十点と若干の石器である。そのうち土器は、故沼田啓太郎石川考古学研究会副会長により「犀川河床よりの縄文」と題して石川考古学研究会々誌第 19 号(昭和 51 年 3 月)に発表されている。この報告が出た事により、研究者間にも縄文晩期の遺跡として認識されるようになった。だが、その特殊な立地条件により、本格的調査にまでは、至らなかったのである。

そのうちに、本遺跡にも開発の波は押し寄せてきた。前述の工事が進展し、昭和53年度開始の御影橋―大豆田橋間工事予定地内に、本遺跡も含まれる事になったからである。昭和53年5月30日付、金土木発第344号で、金沢土木事務所長より、文化財保護課長あてに、遺跡の範囲確認調査の依頼が提出された。同事務所と協議の結果、同年8月23日に同課主事小嶋芳孝、浅田耕治両名により、分布調査が実施された。それは、犀川鉄橋を間に挟み、上流側、下流側の河原に7ヶ所ユンボで深掘し、礫層下に遺物包含層の存在の有無と拡がりを確認することであった。調査の結果、遺跡が存在するため、工事に先立ち、発掘調査が必要である旨の回答を行なった。

翌年になり、昭和54年6月19日付、金土木発第487号で金沢土木事務所長より、文化課長あてに犀川鉄橋遺跡の調査依頼が提出された。これを受けて県立埋蔵文化財センターでは、金沢土木事務所と協議した結果、遺跡が犀川の流路下に存在するため、調査期間が限定されるとし、犀川の渇水期にあたる夏季8月に実施する事となった。第1次調査は、同年8月1日開始した。調査範囲は、犀川鉄橋から下流側へ長さ約100m、岸から幅約10mの範囲である。しかし、調査途中の大雨で増水し、調査区内に多量の土砂が堆積して調査の継続が不可能となった。そのため同年8月20日で調査を終了せざるを得なかった。

第2次調査は、当初昭和55年度に実施の予定であったが、県立埋蔵文化財センター側の調査事業量の増加と調査人員不足の点から金沢土木事務所と協議し、翌年度へ繰り延べることで合意に達した。昭和56年5月21日付、金土木発第530号で金沢土木事務所長より、文化課長あてに調査依頼が提出された。これを受けて同土木事務所と協議した結果、第2次調査を第1次調査時と



同様、夏季8月の渇水期に調査を実施する事とし、同年7月30日より開始することになった。調査範囲は当初、第1次調査地に続く、長さ約40m、幅約10mの範囲であったが、連日の好天に恵れた事と、遺跡の検出状態から下流側へ長さ約60m、幅約10mの範囲を新たに拡張し、調査したが、同年8月21日で、すべての現場作業を終了した。

第11節 第1次調査の概要 (調査日誌抄)

現犀川鉄橋(国鉄、北陸線)より下流の右岸 100 m が第一次調査の調査区である。前年度の試掘調査段階から、現状が河川敷ということもあり、砂礫の堆積が甚しく、当面人力による礫層の排土は困難であると判断されたし、包含層の存する深さも不明であったので工事施行方法を確認した結果、基礎工事の施される河川中央部寄りに巾 2 m のトレンチを下流に向って 100 m 設定し、重機(ユンボ)による礫の排土を開始した。犀川鉄橋寄りでは、以前の工事等により遺物を包含する層及び基盤となる層もすでに消滅していることが判明した。その区間は、約80 m 程度となることが確認され、それより下流域では遺物および基盤(黄褐色粘土層)が良好に遺存することから、その周辺および下流に限って巾8 mに拡張し、また鉄橋より 110 m の地点までの礫の排土を行った。本年は例年になく冷夏の歳にあたり、犀川の流量も多く、8月21日からの大雨のために増水し一夜のうちに調査区が再び礫土でおおわれ、数日は増水した水が濁流となって流れ、それ以後の調査は不可能と判断され、金沢土木事務所と協議の結果、第一次調査を終了し次年度以降継続することとした。以下簡単に発掘調査日誌を抄述する。

7月30日(月) 晴 調査に先立って礫土の排土を開始する。拳大から頭大の河原石が厚く堆積しており想像していたよりは、はかばかしく進行しない。鉄橋寄りでは、遺存状態の悪い事も排土、深掘りの結果序々に判明してきた。翌日もユンボによる排土を続行し、上流および調査区の周囲を礫土の排土で堰提とし、調査期間中の増水の危険性を考慮した。遺存状態の良好な40列から55列の地点に関しては巾8mの拡張を行って排土した。(鉄橋を基点として2mグリッドを設定し、下流域に向って0.1~55と呼称することとした。)7月30日に例年になく遅い梅雨明け宣言が金沢気象台より発表された。

8月1日(火)晴 砂礫を排土した区域に2mグリッドの杭打を開始する。 あわせてユンボによる 排土 後 の残 礫の排土を人力で開始する。河原石を排土することには不慣れなこともあって、道具その他のことについてもいろいろと困難を極めた。それでも礫土に混じって土器片を数点採集することができた。

8月2日(木)晴 岡本晃先生、越坂一也君(国学院大学生、現センター主事)の参加がある。ユンボによる残 礫の排土を続行する。土師器片4、5点残礫の中より採集する。

8月6日(月)晴 基盤となる黄褐色粘土層上に高坏、壺等の完形品が、ころがっているような状態で顔を出してくる。よく注意してみると基盤に不自然にはまり込んだような状況で、土器の周囲には砂がはいり込んでいる。 午後3時頃より雨のために作業を休止することとする。

8月12日(月) 晴 黒褐色粘質土の覆土をもつ土垃状の遺構の半分の発掘を始める(楕円形を呈し長径約2m) タタキ台様の木器が顔を出す。遺存状態が良く擦痕等が良く観察できる。また別地点では古式須恵器坏、無蓋高坏、 坏片も砂礫の間で検出さる。明日より旧盆のために作業を休止する。

8月17日(金)晴 発掘調査を再開する。遺物の出土状況が普通一般の遺跡と違って調査区に散乱に近い状況で 検出されることから、出土地点を平板に記入しながら採り上げることとする。写真撮影も平行して実施する。

8月18日(火)晴 基盤にはゆるやかな凹凸が多く河の流れにより削り取られたり、水路がよどんだりした状況で観察される。拡張区中央部に巾60cmのトレンチを設定し発掘を始める。基盤の土層状況の観察のためである。

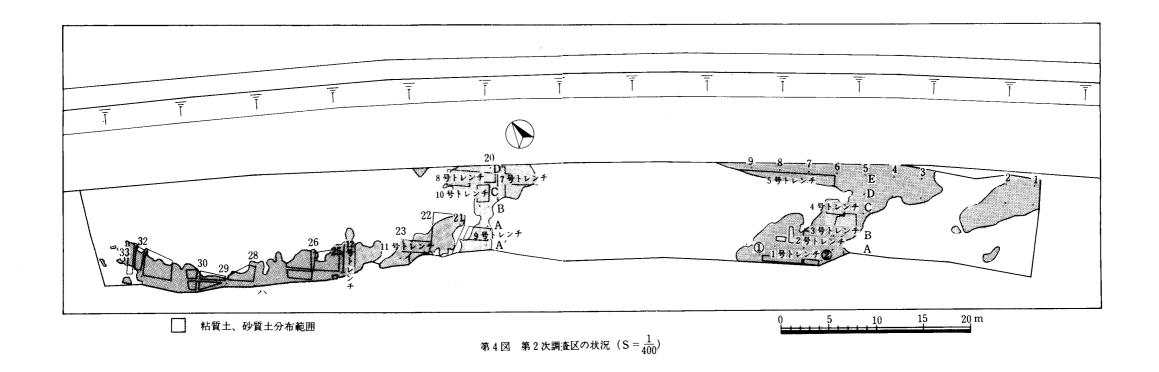
8月20日(月) 曇 岡本 晃先生来跡。試掘トレンチ続行する。土層断面には収縮のために歪曲したことが観察される。基盤断面に上方からの掘り方もなく遺物がかんでいたり樹木片が粘土塊の中にみられたりする。深さ60 cm 程度まで進む。E-44 区より小形の勾玉を採集する。長さ約2 cm の黒褐色を呈する石である。午後金沢市教委南 久和氏来跡。

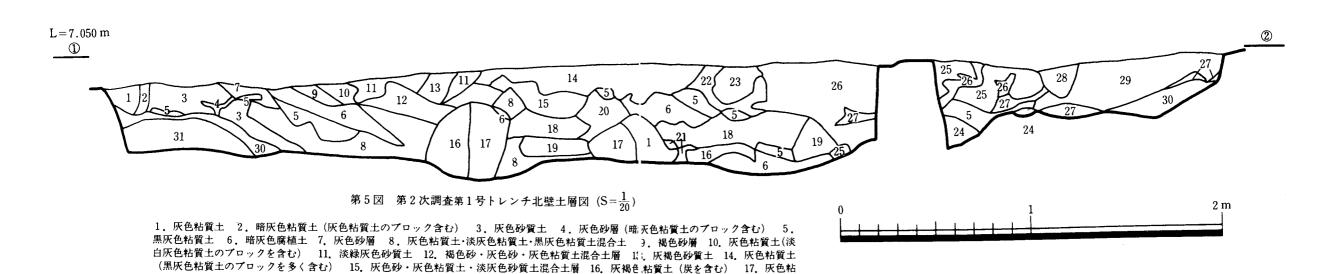
8月21日(火) 曇のち雨 拡張区での遺物の取り上げと試掘トレンチ続行する。青灰色粘土、黄褐色粘土が入り混り、遺物もその土層中に 混じる状況である。午後より雨が激しくなり休止とする。翌日は犀川が増水し調査区は2~3日水がひかず状況は 不明。4日目には序々に水がひき調査区がみえるようになったが周囲に水止めのために積み上げてあった砂礫が一 面に埋め戻されてしまっていた。これから、最初に戻って排土しなおして調査を再開しても台風シーズンでもあり、また今回のような事が起きる可能性が高いため、金沢土木事務所と協議の結果、次年度継続することとし、第一次 調査を終了することとした。

第Ⅲ節 第2次調査の概要 (調査日誌抄)

調査は7月30日より開始した。調査区は犀川右岸第1次調査区に後続する。幅10m、長さ100mの範囲である(当初は40mの長さであったが、調査の進展により約60m拡張したものである。また、一部第1次調査区と重複した部分もあった)。先ず調査に先立ち、調査予定地上を流れていた流路をユンボで締め切り、左岸側へ付け替える作業と調査予定地の上を覆っていた礫層を除去し、粘質土層の検出に努めた。粘質土層は調査区全域に拡がっているのではなく、水流により、岸側は護岸ブロックの下の礫層・粘質土層・褐色砂礫層まで下っている部分がほとんどで、残っている部分は少なかった。A~B-19区から下流では、中洲側に比較的残っていた。

- 7月30日(休晴れ 本日より調査開始、ユンボを使用して右岸側の調査予定地上を流れていた流路を締め切り、左 岸側へ新たに付け替える作業を行なう。
- 7月31日 金晴れ 前日の作業と調査予定地の河原石の除去、粘質土層の検出作業を行なう。
- 8月3日(月)晴れ 調査予定地でグリッドの設定、および杭打ち作業と、調査区横の土堤の草刈り作業を行なう。
- 8月4日(火)晴れ 午前中、土堤の草刈り作業を行なう。午後調査区A~E-1~16区の粘質土層上の砂利をジョレン、移植ゴテ等を使用して除去し、粘質土層の検出を行なう。
- 8月5日(水晴れ A~E-7~12区の粘質土層の検出作業を行なう。
- 8月6日休晴れ 前日と同様の作業を行なう。
- 8月7日 金晴れ 粘質土層上面から検出した遺構の掘り下げと第1次調査時に設定された2号・4号トレンチの 横に、1号・3号トレンチを設定して掘り下げる。 大豆田大橋脇のレベル原点よりレベルの移 動を行なう。仮原点L=7.215 m
- 8月8日出雨 前日設定したトレンチを掘り下げる。C-7、8区、D-7区で当初土坂やピットとしていたのち晴れ 遺構より出土した土器、木製品を取り上げる。調査区を下流側へ約60m拡張するため、ユンボを使用して河原石の除去作業を行なう。除去した所から順次ジョレン、移植ゴテで粘質土層の検出作業を行なう。





質土(炭を含む) 18. 15に灰色粗砂を多く含む 19. 褐色砂層(灰色砂を少量含む) 29. 灰色粘質土(黒灰色粘質土を少量含む) 21. 暗灰色粘質土(炭を多く含む) 22. 淡灰色砂質土 23. 灰褐色粘質土 24. 淡灰色粘質土 25. 灰色料質土・淡灰色砂質土・黒灰色粘質土 12. 大水灰色砂質土・黒灰色粘質土 26. 淡灰色砂質土 27. 灰色砂質土 28. 黒灰色粘質土 29. 暗灰色粘質土(炭を含む) 30. 褐色粘質土 31. 褐色砂礫層

(ベース)

- 8月10日(月)晴れ 午前中、拡張区側の土堤の草刈り作業を行ない。その後、粘質土層を掘り下げる。午後、埋文 センター橋本次長、現場視察のため来跡。
- 8月11日(火)晴れ 午前中、拡張区のグリット設定、杭打ち作業と粘質土層の掘り下げ作業を行なう。午後も杭打 のち曇り ち作業を継続する。1号トレンチ、5号トレンチの北側壁面の土層実測の準備をし、一部実測 作業に入る。
- 8月12日(水)晴れ 前日に引き続いて粘質土層の掘り下げ作業と1号トレンチ、5号トレンチの土層の実測作業 を行なう。1号トレンチは、実測が終了したので、土色を記入する。
- 8月13日休晴れ 粘質土層の掘り下げと5号トレンチの土層実測図に土色を記入する。 A~E-1~11 区とB 杭列中間点あたりまでの平板測量を行なう。
- 8月17日(月)晴れ B杭列中間点からロ、ハー28区までの平板測量を行なう。
- 8月18日(火)晴れ ロ、ハー28区からロー33区の残りの部分の平板測量を行なう。 D、E-7~8区の灰色、褐色粘質土層出土の遺物、1~6号トレンチ、A~イー22区、イー23区、ロー25区各々出土の遺物を平板図に地点を記入して取り上げる。
- 8月20日休晴れ ハー29区からニー31区にかけての灰色、褐色粘質土、同砂質土、同砂礫層を掘り下げる。午のち曇り 後、石川考古学研究会副会長荒木繁行氏と埋文センター松岡所長来跡する。
- 8月21日鐵晴れ 午前中、ロ、ハー32、33区の残りを掘り上げ、その範囲を平板測量する。また、本遺跡次年 度調査用の基本杭を右岸土堤に4本設置する。午後、発掘調査が終了したので器材の点検整理 後、センターへ撤収する。

第川章 遺構と層序

本遺跡の基本的層序は、犀川上流から流出して堆積した褐色砂礫層がベースで、厚き数m以上にわたり堆積している。この層の上部は、水の流れによって生じた凹凸があり、この上に褐色粘質土と褐色砂質土が堆積している。堆積の状態は、ベースの褐色砂礫層が凹んでいる所にはやや厚く約5~10 cm、凸している所には、僅かに約2~3 cm という割合である。このような状態からこの層は、川の澱みに自然堆積したものであろうと思われる。その土色も水中に含まれていた鉄分の沈澱付着により褐色となったと推定される (当初は、淡灰色系統の土色)。鉄分を含み堆積しているためかなり硬くなり、移植ゴテだけで掘り下げることは困難であった。この層の上に堆積しているのが広義の灰色粘質土、灰色砂質土である。堆積状態は、A~E−1区からA~E−11区、B−20・21区、C−19~21区、D−19~21区、ロ−26・27区、ハ−27区では、厚い所で50~100 cm を測る。これより下流側のグリッドでは、褐色砂礫層の上に褐色砂質土が5~10 cm 堆積し、この上に薄く灰砂質土が堆積していた。全体的に調査区の上流側では灰色粘質土の存在する割合が多いが、下流へ行くにしたがい灰色砂質土へと変化していた。

遺物の出土状況は、A~E-1~11区にかけては、灰色粘質土中から(まれに褐色砂礫層上面からも)、土師器、須恵器、木製品が多く出土した。土師器片の中には、全体の器形を窺えるものも少なくなかった。A~B-20区、C~D-19区から下流にかけては、灰色砂質土中から(まれに褐色砂質土、褐色砂礫層上面からも)、縄文土器、土師器、須恵器が出土した。特にイ~A-22区、イ-23区、ロ-25・26区では、縄文土器が出土した。A′-22区の中央部の凹みには、胡桃、栗、栃の実等の自然遺物が約40cm×約30cmの範囲で暗灰色砂質土中に一塊りとなって出土し、その中には、縄文土器、石皿等の石器の破片(2次的加熱の痕跡を有するものも認められる。)も含まれている。

遺構については、当初A~E-1区~11区の灰色粘質土、灰色砂質土の上面で検出した暗灰色粘質土、黒灰色粘質土を土 塩やピットと考えたが、掘り下げるにつれて、極端に浅かったり、壁面が外側へ突出したり、輪郭が不鮮明になったりした点から最終的には遺構と認定するまでには至らなかった。それは、調査区に設定したトレンチ等の壁面の観察から(図版1.参照)、人頭大前後からそれ以下の大きさの灰色粘質土から黒灰色粘質土の土色のブロックが、灰色粗砂から細砂を間に挟み、複雑に再堆積していることから、うなずけられる。当初遺構と考えた暗灰色、黒灰色の部分も、再堆積した粘質土のブロックであったとの結論に達した。その粘土ブロックの大きさとその中に含まれる土器片の割れ口のシャープさからして、本調査区からさほど離れていない近距離の場所に営まれた遺跡内で自然堆積していた土層が、洪水等により削られて調査区あたりまで流され、この上に砂礫層が厚く堆積し、時間の経過に伴なって再度侵食作用を受けて川底が低下した結果、これが露出したものであろう。

第Ⅳ章 遺 物

犀川鉄橋遺跡の第1·2 次調査で検出した遺物は、縄文時代から古墳時代と近世のものがある。 以下縄文土器から順次説明して行きたい。

第1節 土 器

(1) 縄文土器

出土した土器は全体の量は少ない。いわゆる精製土器は下記の如く群別したい。また、いわゆる粗製土器の条痕文、縄文(単節、無節)無文、擦痕、底部については、器形と器面調整のあり方から分類して行きたい。

- 第1群—縄文時代前期末~中期初頭(型式不詳)
- 第2群一縄文時代晚期前葉(八日市新保式)
- 第3群-縄文時代晩期前葉 (勝木原式)
- 第4群一縄文時代晚期前葉(御経塚式)
- 第5群一縄文時代晚期中葉(中屋式)
- 第6群一時期不明

第1群 縄文前期末~中期初頭にかけてのもの(第9図16)

これは器面にL撚りの木目状撚糸文を上下方向に施している。深鉢の胴部であるが、器面はかなり磨滅している。

- 第2群 縄文時代晩期前葉の八日市新保式に含められるもの(第6図1~34)
- 1類 波状口縁の深鉢と推定されるもの(第6図1~16)
- 1類a 波頂部の連結三叉文と口縁部沈線が抉りによって続いているもの(第6図1) 内外面 ともヘラミガキされ、胎土焼成も良好である。色調は淡灰褐色から灰色を呈しているが、外面に はススが付着している。
- 1類b 波頂部に三叉状連結文をもつもの(第6図2~9)2はいわゆる八日市新保式の波状口縁の深鉢に施される典型的な三叉状文である。その描出法は先の尖ったへラ状具でなされているが、中は丁寧にヘラミガキされている。胎土には砂粒がやや多く、焼成も良好で硬いがやや磨滅ぎみである。色調は外面が灰茶褐色、内面が褐色と淡褐色を呈している。3、4にも波頂部に三叉状連結文を施しているが、ヘラ状具で抉ったままでやや雑である。口縁部の沈線も3は太く、4は細い。3は胎土、焼成は良好であるが、色調は外面が茶褐色でススが付着し、内面は暗茶褐色を呈している。4は胎土、焼成は良好であるが、色調は外面が灰褐色、内面が灰褐色と淡黄褐色を呈している。5~9も口縁部の破片である。5は内外面ともにヘラミガキされ、5条の沈線が施されている。外面にススが、内面に炭化物が付着している。胎土には粘土分が多く硬く焼か



— 16 —

れている。色調は暗茶褐色を呈している。6も器面がヘラミガキされ、口縁部の沈線は3条あり、2本が太く1本が細い。胎土焼成は良好で、色調は外面が濁灰褐色でススが一部付着し、内面は 黒褐色を呈している。7も器面はヘラミガキされ、口縁部に3条の沈線が施されている。胎土、 焼成とも良好で、色調は暗茶褐色を呈し、外面にススが付着している。8も器面がヘラミガキされ、胎土、焼成とも良好で、色調は暗茶褐色を呈し、外面にススが付着している。9は2条の沈線を施している。

1類c 口縁部の沈線間に列点文を施しているもの(第6図10・11)10は胎土にやや砂粒を多く含んでいるが、焼成は良好である。内外面ともヘラミガキされ、色調は外面が暗茶褐色、内面は褐色を呈するが、一部に黒斑が認められる。11は5条の沈線があり、中央部の沈線はやや太い。内外面はヘラミガキされ、胎土、焼成とも良好で硬い。色調は外面が茶褐色から暗茶褐色を、内面は暗茶褐色を呈している。頸部は器厚が薄くなっている。

1類d 口縁部胴部に縄文を施すもの(第6図12)器面に $L\left\{ egin{matrix} R \\ R \end{matrix}
ight.$ の縄文を施している。

1類 e 波状口縁の深鉢胴部である(第6図14~16)14は右下りの条痕調整後4本の沈線をめぐらし、これを弧線で切っている。胎土焼成は良好で、色調は外面が暗茶灰色でススが付着している。内面は濁茶褐色、茶灰色、暗茶褐色を呈している。15は口縁部に5条の沈線と列点があり、11の深鉢の胴部の可能性が高い。胎土、焼成とも良好で、色調は外面が茶褐色と淡褐色でススが付着し、内面は暗茶褐色を呈している。4はやや雑に沈線を施している。

2 類 波状口縁部に連結三叉文と弧線を施している小型の鉢 (第6図13) 形態的に小型の波状口縁の鉢と推定される。口縁部に上記以外に文様がないものが特徴である。焼成は良好である。 色調は外面が暗茶褐色と暗褐色を呈し、ススが付着している。内面は暗褐色を呈している。

3類 口縁部が直立、内湾、内屈する椀形の浅鉢(第6図17~27)

3類a 口縁部に沈線とヘラ状具による抉り込みで長方形区画を作り、その中に連結三叉文と 弧線、列点を施しているもの(第6図17)。胎土、焼成とも良好である。色調は外面が濁灰茶色、 黒褐色を、内面は明濁灰茶色を呈している。

3類b 口縁部が内湾するもの(第6図18)沈線を三角形に配し、その中の部分をヘラ状具で抉っている。胎土、焼成とも良好である。外面は暗茶褐色と茶褐色を呈し、赤色顔料を塗っている。内面は暗茶褐色を呈している。

3類 c 口縁部の内屈するもの (第 6 \boxtimes 19) 口縁端部に R $\begin{cases} L \\ L \end{cases}$ の縄文を施して区画とし、その中に連結三叉文と弧線を施している。胎土、焼成とも良好、色調は淡灰褐色を呈している。

3類d 口縁部の内屈するもの(第6図21~25)3類cのものと類似しているが、区画の縄文帯のないものである。ただ、25は連結三叉文どうしの間の縦位沈線である。ただ 22 は波状口縁をもつ浅鉢の口縁部の可能性もある。

3 類 e 口縁端部が若干内屈するもの(第6図26)口縁部に沈線施文後、ヘラミガキして消している。 3 類 f 波状口縁の浅鉢で内屈するもの(第6図20)口縁部の上下端に $L \left\{ \begin{smallmatrix} R \\ P \end{smallmatrix}
ight.$ の縄文を施し、そ

の中に沈線を施している。

3類8 口縁部が直立して小波状を呈するもの(第6図28)口縁部に先の丸い棒状具で3本単位の縦位沈線を2本と3本の平行沈線でつなぐもの。3本でつなぐものはいわゆる連結三叉文の祖型的なものになっている。

3類h 波状口縁で外反するもの(第6図27)口縁部に連結三叉文を施している。口縁内面は肥厚して稜を持つと推定される。

4類 口縁部肥厚の浅鉢 内外面は丁寧にヘラミガキされている。(第6図29~33)

4 類 a (第 6 図 29) 縦位に 4 本の粘土紐を貼付し、ヘラ状具で刻みを入れ、これらをつなぐ連結三叉文を配している。

4 類 b (第 6 図 30) 4 類 a と類似しているが、連結三叉文のまわりにヘラ先による列点をもつもの。口唇部に赤色顔料が塗られている。

4類c (第6図31) これも同様であるが、縦位の粘土紐が2本のもの。

5類 口縁部に沈線を施す浅鉢 (第6図32~34)

5 類 a (第 6 図 32) 口唇部に 2 条のへう先による沈線をもつ。

5 類 b (第 6 図 33) 口唇部に 1 条の沈線をめぐらし、その後細かい L ${R \atop R}$ の縄文を施している。 ただ、34 については沈線がかろうじて残っているのみで、3 類 8 の浅鉢とも考えられるが、一応 5 類に含めた。

第3群 晩期前葉の勝木原式に含められるもの (第7図1・2)

1類 深鉢の口縁部と推定される(第7図1)。沈線内にL ${R \atop R}$ の縄文と玉抱き三叉文を施している。

2類 浅鉢かと推定されるもの(第7図2)

第4群 縄文晩期前葉の御経塚式に含められるもの(第7図3~16)

1類 頸部から外反する波状口縁の深鉢(第7図3~7)

1類a (第7図3) 波状口縁の深鉢で、波状口縁部外面に単独三叉文と波状口縁部に沿って $L \begin{cases} R \\ R \end{cases}$ の縄文帯をめぐらしている。内面も単独三叉文と波状部に沿って2本の幅広の浅い沈線と $L \begin{cases} R \\ R \end{cases}$ 縄文を施している。

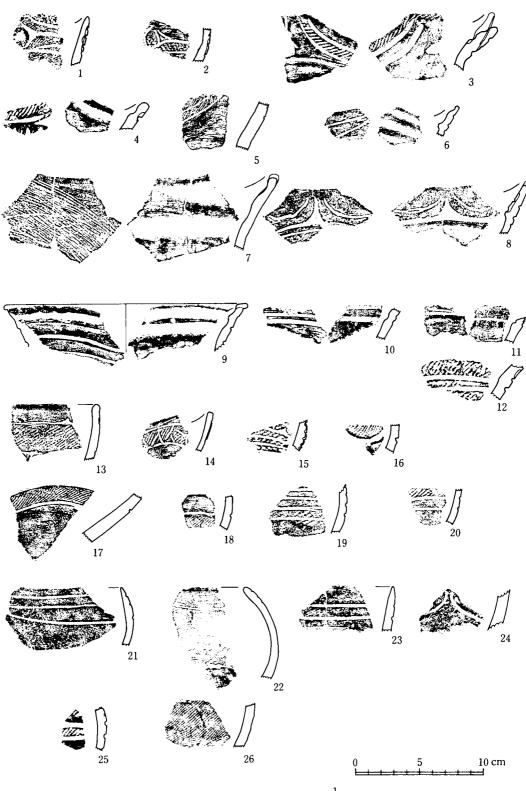
1 類 \mathbf{b} (第 $\mathbf{7}$ 図 $\mathbf{4}$) 波状口縁に沿って沈線を施し、これと口縁端部の間に \mathbf{L} \mathbf{f} \mathbf{g} 大 \mathbf{f} \mathbf{f}

1類c (第7図5) 波状口縁外面に沿っての沈線内に $L\left\{ {r\atop r}$ 撚りの縄文を施している。

1類d (第7図6) 波状口縁外面に沿って細い沈線を、内面に幅広の浅い沈線をめぐらしている。形態的にはやや小型の鉢の可能性がある。

1類e (第7図7) 外面には右下りの条痕調整を行い、内面には幅広の浅い沈線等を施している。

2 類 外反する平縁の深鉢 (第7図9~12)



第7図 繩文土器実測図 $(S = \frac{1}{3})$

- 9は外面にやや細く深い沈線を、内面に幅広の浅い沈線を施している。口縁端部は外方へ突出 している。10 もほぼ同様のものである。11 は口縁部と内面に 1 条の沈線を施し、内面は肥厚して 稜を持っている。12 は外面に $\mathbb{L}\left\{egin{array}{c} \mathbf{r} & \mathbf{m} \end{pmatrix} \right\}$ の縄文を施文後、2 条の沈線をめぐらしている。内面には 稜がある。17 は沈線の区画内に $L \left\{ r \atop r \right\}$ の無節縄文を施している。
- 3類 波状口縁の浅鉢(第7図8)内外面に波状口縁部に浴って弧線と、口縁部の沈線と結び 付いた三角状の抉りを施している。

4類 椀形乃至浅鉢形土器と推定されるもの (第7図13~20)

4 類 a (第 7 図 13) 平縁で口縁端部が外反し、胴部の平行沈線間に L ${R \atop R}$ の縄文を施す。沈 線には三角の抉りを加えている。

4類b (第7図14) 小波状を呈すると推定されるが、沈線間に $L\left\{ {rac{R}{n}}$ の縄文施文後、ヘラ先 で単独三叉文を施している。

15·16 は胴部文様であるが器形が判然としない。15 は沈線に三角形の抉りを施し、16 は円形か 楕円形区画内に L $\begin{cases} R & (細い) \\ R & (太い) \\ R & (細い) \end{cases}$ の原体で縄文を施している。17 は沈線間に L $\begin{cases} r \\ r \end{cases}$ の縄文を施すが、 $18\sim20$ は沈線内に L $\begin{cases} R \\ R \end{cases}$ の縄文を施している。18 は外面に赤色顔料を塗っている。

第5群 晩期中葉の中屋式に含められるもの (第7図 25.26)

25 は口縁がくの字に外反する深鉢の胴部と推定される。 L ${R \choose R}$ の縄文帯と三叉状入組文を施している。外面に赤色顔料を塗っている。26 は外面に L ${R \choose R}$ の縄文を施している。

第6群 時期不明のもの (第7図 21~24)

21~24 は時期不明である。21 は口縁が内湾する椀形か浅鉢形土器と推定されるもので、3 本の沈 線を施し、胴部に非常に細かい $\operatorname{L} \left\{ egin{matrix} \mathbf{r} \\ \mathbf{r} \end{smallmatrix}
ight.$ の縄文? を施している。また外面と内面に赤色顔料が塗られた 痕跡が認められる。22は21より内湾し、3本の沈線を施している。23は口縁が外反するもので、 3条の沈線を施している。24は弧線を施している。

条痕文を有する土器 (第8図1~19)

1類 口縁部が胴部から全体に外反する深鉢(第8図1~3)

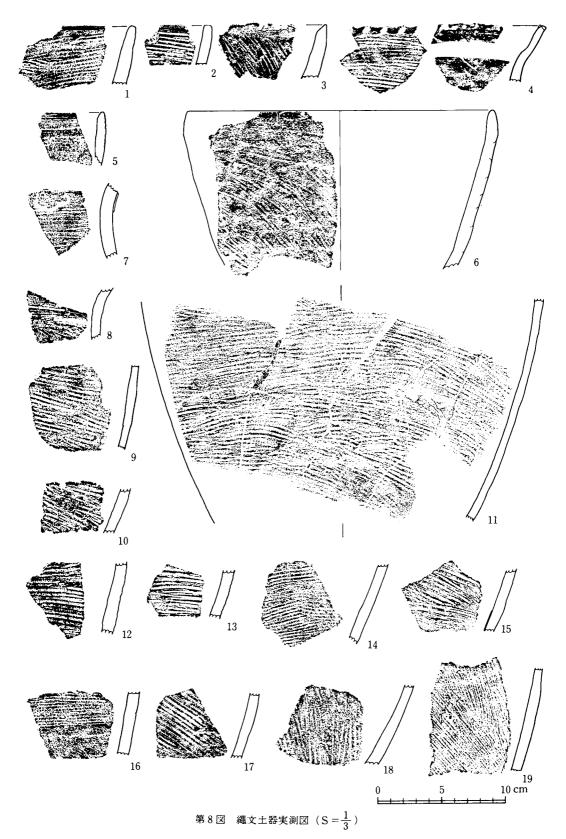
1類a (第8図1~2) 口縁部は平縁で口唇部と内面はヘラミガキされ、外面の条痕方向 も1は左下り、2は右下りで3単位?かと思われる。2は外面にススが付着している。

(第8図3) 平縁であるが、口縁端部の内外面は指ナデ調整をしている。外面はへ ラ状具でナデつけるように調整し、その後右下りの条痕文を施している。

2類 口縁部が外反するもの(第8図6) 端部で内屈している。外面は接合痕を残す程度の ナデ調整後、右下りの2~3条単位の条痕調整を施している。外面にススが付着し、形態的には 中型の深鉢である。

3類 口縁部の直立するもの(第8図5) 横位の条痕を施している。外面にはススが付着し ている。

4類 口縁部が頸部から外反するもの(第8図4・7・8)



— 21 —

(第8図4) 外面に2条単位?の条痕を施し、内面に幅広の浅い沈線をあぐらし、 4 類 a 口唇部に棒状具による刻み目を施している。

(第8図7・8) 7は外面に横位の条痕を施し、上部に沈線を施している。外面に はススが付着している。この土は胎土に 0.5 mm 程の砂粒を多量に含み、焼成は良好で硬い。 8 は外面に雑な条痕を施している。

第8図9~19は胴部である。9・10・12・13・15・17は右下りで3~5条単位の条痕調整を加 えている。条痕も明瞭なものと不明瞭なものがある。11 も 3 ~ 5 単位の条痕を外面に 3 ~ 7 cm ぐ らいの長さでまんべんなく調整している。その方向も部位によって一定しない。内面は幅約3cm のヘラ状のもので上から非常に丁寧にナデている。15は外面にススが煮こぼれ状に付着してい る。14 は3 単位で左下りに、16 は胴部下半で上半分に横位の細い条痕を施し、下半部は接合痕を 残している。18は縦方向にあり、19は刷毛目状の様に細く右下り方向になっている。

縄文を有する土器(第9図1~10)

1類 平縁で口縁が外反するもの(第9図1・2)1は口縁部が尖りぎみで、外面にR ${L(\chi n) \choose L(\chi n)}$ の原体とR ${L(\chi n) \choose L(\chi n)}$ 原体を使用している。形態的には中型から小形の鉢形土器かと推定される。外面にススが付着している。 2 も同様なタイプのもので、外面にL ${R \choose R}$ の縄文を施している。 2類 平縁で口縁部が直立するもの(第9図 3・4) 3 は外面にL ${R \choose R}$ の縄文を施している。 21

は外面に $R \left\{ \begin{smallmatrix} L \end{smallmatrix}$ 縄文を施し、口唇部にも同様の原体で縄文を施している。外面にススが付着してい

3類 頸部でくびれてから外反するもの(第9図5・6) 5は頸部が幅広く凹む形になり、 ここに $R \left\{ egin{aligned} L(x_{
m N}) \\ L(x_{
m N}) \end{aligned}
ight.$ の縄文を施している。 $G = C \times R$ の縄文 を施す。

施す。 $\textbf{第9図7} \sim 10 \text{ は胴部である。 7 は付加条の原体で、8 は L } \left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\}_{1}^{1} \text{ で 施している}.$ 10 は不明である。

無節縄文を有する土器 (第9図11~15)

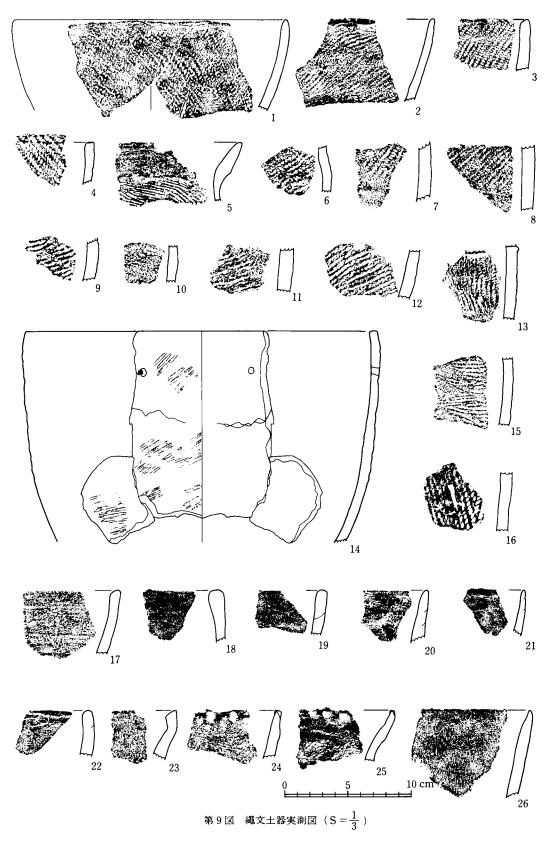
これらは器面に $L\left\{egin{array}{ll} r\\r \end{array}
ight.$ の縄文を施しているものが多い。14 はその中で器形が判定できるもので ある。平縁で直立し、端部で若干内側へ入っている。外面には多量にススが付着しているが所々に $\mathbf{L} \left\{ egin{array}{ll} \mathbf{r} \\ \mathbf{r} \end{array}
ight.$ の無節縄文を施している。この土器の注目すべき点は、口縁部に焼成後に穿たれた孔が あり、外面側に補修用に使用したと推定される縄が僅かに残っていた。 さらに補修した破れ口(ス クリーントーン貼付部分)に黒い付着物が認められる。 $11\sim13$ 、15も外面に $\mathbb{L}\left\{ egin{array}{c} \mathbf{r} \end{pmatrix}$ の無節縄文が施 されている。

無文土器 (第9図17~25)

1類 口縁がやや外反ぎみに立ち上っているもの(第9図17、19~21)

1 類 a 口唇部がやや丸いもの (第9図17・19) 19は粘土の接合部分で色調が違っている。

1類b 口唇部が尖りぎみのもの(第9図20·21) それぞれ外面に接合痕を僅かに残してい



- 23 -

る。

2 類 口縁部がやや内側へ入っているもの (第9 図 18・22) 18 は口縁端部が肥厚している。

3 類 頸部から外反した口縁が、端部で内屈しているもの(第9図23) 外面にはススが付着している。

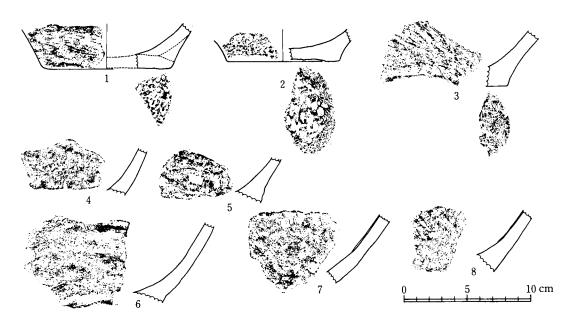
4 類 やや外反するもの(第9図24·25) 口縁外面の端部と口唇部を棒状具(24)や指頭(25)で押している。

刷毛状調整を有する土器 (第9図26)

平縁で外反する深鉢である。口縁内面端部は指頭で押えられて凹んでいる。外面には縦位方向 に刷毛状工具のようなもので、細い条痕調整をしている。

底部 (第10図1~8)

底部は粗製深鉢のものと推定され、外面にヘラ状具でナデつける形でミガキを加えているもの($1\sim5\cdot8$)と丁寧にミガキを加えているもの($6\cdot7$)がある。 $7\cdot8$ の内面には炭化物が付着している。



第 10 図 縄文土器実測図($S = \frac{1}{3}$)

(2) 土師器 (第11図~第14図)

第1・2次の調査により検出した土師器は2、3点の完形品を除けば、全て図上でしか復元できない破片ばかりである。総点数で164点あるが、器形の窺えるものは、小片であってもできるだけ数えあげると次のような組成となる。甕口縁部片23点、同胴部片37点、壺口縁部片6点、

坏3点、高坏身片43点、同脚部片35点、甑3点(把手2、胴底部1点)、腿1点、底部片9点、不明4点であり、高坏が圧倒的に多く、次いで甕・壺の順で、他の器形のものは極めて少ないといえる。以下器形別の分類に従って、説明を加えることとする。

甕 甕は第1・2次 調査の合計が口縁部片で23点、胴部片37点をかぞえ本遺跡においては高坏についで多い。以下、器形・整形等によって5分類し、おのおのその特徴について記すこととする。 **甕I 口唇部に強いヨコナデのため凹部を周らすもの** (第11図1)

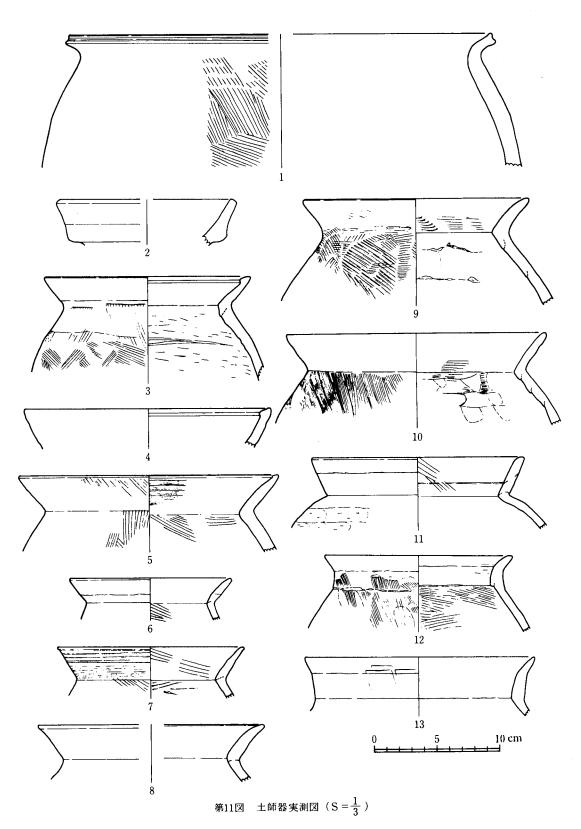
口径33 cm 以上、現存高10.5 cm を測り、口縁端部に粗いヨコナデにより一条の凹線を周らす。 屈曲する頸部を経て、ゆるく外反しながら長胴形を描く器形とみられる。口唇部より頸部につい ては刷毛状具によるヨコナデを施す。頸部より下位の肩部については、巾2 cm の粗い(単位7本 程度)の右下りの刷毛状工具によるナデ(櫛に近い)を施し、胴部の施文具は同様であるが、 やや傾斜角のゆるい右下りのナデを施している。内面に関しては、全面にわたり厚く炭化物 の付着がみられ調整技法等の観察は不可能である。胎土には粗い長石・雲母を多く含み、赤茶褐 色を呈し焼成は良好である。本類に含まれる唯一のものである。

甕II 有段口縁を有するもの (第11図2)

口径 16 cm 内外に復元できる口縁部のみの破片である。器外面では巾 3 cm の口縁帯を設け、屈曲するゆるやかな有段口縁となるが、内面ではゆるやかに内湾しながら端部を丸くおさめている。器肉も全体に厚く、残存部に関する限り、内外面ともに刷毛状具によるヨコナデを施す。灰白色を呈し、胎土には 1 ~ 2 mm の砂粒をやや含み、焼成については普通である。

甕Ⅲ 内面に肥厚のみられるもの(第11図3~5)

3は、口径16.4cm、現存高7.3cmを測るものである。器外面では炭化物の付着がみられ判然とはしないが、口縁帯は刷毛状具によるヨコナデののち、若干へラ磨きを施しているようである。胴下半については刷毛状具により羽状にナデを施す。内面では口唇端部に指頭による巾8 mm程度の面を取るために押えながらヨコナデを施した結果、内面がゆるく肥厚し頸部まで同様なヨコナデを施すが、やや横位のヘラ磨きも施されているようである。胴内面は箆先か棒状具先端(巾約5 mm)により、強く横位に掻きとり擦痕が甚しい。淡灰褐色を呈し、外面には炭化物の付着が多く、胎土には砂粒(径2~5 mm)を含むが焼成は良い。4も3と同様内面肥厚する "く"の字口縁の甕である。口径19 cm 前後を測る口縁部のみのものであるが、内外面ともに刷毛状具によるヨコナデを施す。部分的に箆磨きも施しているようである。灰褐色を呈し、外面には炭化物の付着が認められ、胎土にはやや砂粒を含むが焼成は良い。5は、口径20.3 cm、現存器高6 cmを測るものであるが、先述の二例よりは口縁部の押えが弱く、そのため内面の肥厚も弱い。口縁部外面は刷毛状具による右下りのナデののち細いヨコナデを施し、頸部より胴部にかけては、刷毛状具によるほぼ縦位の粗いナデ痕を残す。内面は、口縁に粗いヨコナデ(外面胴部と同じか)を施し、一部頸部下にまで右下りの粗いサデ痕を残し、それより下位は箆削りとみられるが判然としない。赤茶褐色を呈し、胎土には砂粒(径1~4 mm)を少量含み、焼成はややあまい。 本類



– 26 **–**

では内面肥厚する "く"の字口縁の甕を集めたのであるが、本遺跡の中では決して多いものではない。 3、4は口縁端部に7~8 mm の面を有するために、その内面もゆるく肥厚するが、5 では口縁端面も4~5 mm と巾狭で、その押えも弱く、かろうじて内面が肥厚する程度である。 3、4 と 5 とでは胎土、焼成、調整技法等においても明らかな差異が認められる。

甕IV いわゆる "く"の字口縁のもの (第11図 6~11)

6 は口径 12.8 cm、現存高 3.3 cm を測る細片であるが、"く_"の字に屈曲して外反し端部を丸くお さめるものである。外面は細い刷毛状具によるヨコナデ、内面は外面と同様なヨコナデ、頸部で は稜をなし、粗い刷毛状具による右下りのナデを施す。7は口径 14.6 cm、現存高 4 cm を測り、 外面には炭化物の付着がみられ、口縁部では粗いヨコナデ、頸部より下位では同様に粗い右下り のナデ痕が残る。内面でも同様右下りのナデがみられるが、二次調整がなされたかは磨耗のため 不明である。頸部では鋭い稜をなし、胴部では刷毛状具によるとみられる鋭い搔きとりがみられ る。 8 は口径 16 cm 前後に復元できるものとみられるが、器表の磨耗が甚しく調整等の観察は不 能である。口縁端近くの内面がやや凹み、端部も先細り丸くおさまるものである。9 は口径 18 cm、 現存高 8 cm を測るものである。口縁外面は粗い刷毛状具によるヨコナデのあとさらに細いヨコナ デを施す。頸部から胴部にかけては巾2cm 前後(8条)の硬い刷毛状具により、羽状に近いナデが 明瞭に残る。(刷毛状具というよりも、頸部に残っている痕跡をみると板状に近いものと考えられ る)内面でも口縁外面と同様に粗いヨコナデのち細いヨコナデを施す。頸部では鋭い稜をなし、 胴部では粗い右下りのナデとへう削りを多用しているようであるが、前後関係については不明で ある。また粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。器肉は全体に厚く、灰茶褐色を呈し、胎土には砂 粒 (径 2 ~ 4 mm) をやや含むが、焼成は良い。10 は口径 10.6 cm、現存高 7 cm を測り、口縁外面 にはヨコナデ、胴部では右下りの粗いナデ、内面口縁部はヨコナデ、頸部では鋭い稜をなし胴部で は粘土紐の巻き上げ痕跡が明瞭に残り、刷毛による弱いナデと削りが認められる。灰褐色を呈し、 胎+には砂粒 (径 1 ~ 3 mm) をやや多く含み焼成は良い。 11 は口径 16.3 cm、現存高 5.5 cm を 測り、口縁部には炭化物の付着が認められ、粗いヨコナデを施し、粘土紐の接合痕を残している。 胴部はわずかしか遺存していないので全体がわらないが、巾1cm 強で横位の箆削りを施している。 内面では粗い右下りのナデ、胴部については箆削りとみられる。黄褐色を呈し、胎土には粗砂粒 を多く含み焼成は普通である。

甕 V (第11図 12·13)

12 は口径 14.8 cm、現存高 5.7 cm を測るものである。頸部でやや内傾し口縁帯中位で外反し端部にいたるものであるが、おのおのに粘土紐の接合痕が残る。口縁帯中位より口唇部までは細い刷毛状具によるヨコナデ、胴部にかけては粗い刷毛ナデをやや右下りに施す。口縁帯内面も外面の屈曲に呼応し、調整も同様な粗いヨコナデである。胴部では粗い刷毛によるやや右下り気味のナデを施す。灰褐色を呈し外面には特に炭化物の付着が認められ、胎土にはやや砂粒を含み焼成

— 27 —

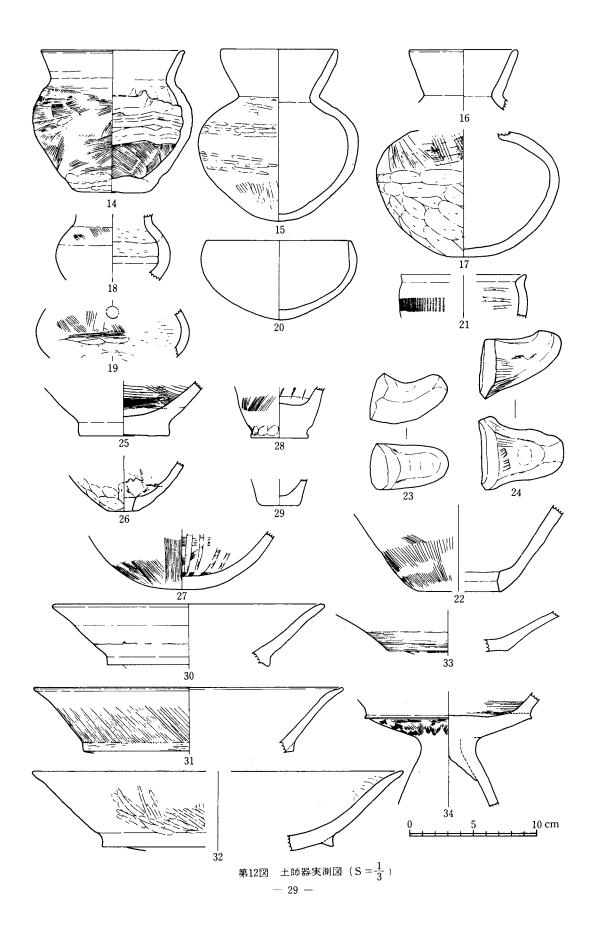
は良好である。12 は内面については磨耗しており外面では、縦位の細いハケナデのあと箆先状の もので横位に軽くナデを施しているようであるが明瞭でない。

甕VI (第12図 14)

14 は口径 11.3 cm、最大胴径 12.6 cm、底径 5 cm、器高 11.3 cm を測るものである。頸部より口唇部にかけては粗いヨコナデののち磨きに近いナデを再び施しているようである。胴部は雑な箆削りののち巾 7 ~ 8 mm (10条)の刷毛具で、おおむね左下りにナデを施す。底部近くでは指頭圧痕がみられる。内面では頸部より口唇部にかけては刷毛状具のヨコナデののち、磨きを施しているように観察される。頸部より胴中位にかけては箆先状のもの(0.8~1 cm)で搔取りに近いヨコナデを施す。底部は指頭により成形したのち、底部より胴中位にかけて、器表の刷毛状具と同様のもので渦巻き状(逆時計回り)に一面にナデを施す。さらに、外面に粘土紐の巻き上げ痕を残す。また内面では胴部と口頸部の接合痕も明瞭に観察できる。淡褐色を呈し、胎土には砂粒(2 mm 前後)を含むがよく精選され、焼成は堅緻である。

壺 (第12図 15~19)

15 は口径 9.2 cm、最大胴径 12.8 cm、器高 13.7 cm を測るものである。球形に近い胴部に外反 する口縁帯が、やや内湾して口唇にいたる通有のものである。口縁帯はやや粗い刷毛状具による ヨコナデ、胴部では、横位、縦位の箆磨きを施しているが、底部近くでは縦位のものが多くなる。 底部より胴中位にかけて黒斑がある。口縁帯内面では巾広な刷毛状具 (約 4 cm 親指か) で一気に 逆「の」の字状にヨコナデを施す。胴部内面は観察が難しいが、箆削りと刷毛状具による渦巻状のナ デが認められる。外面には朱塗の痕跡が所々に残り、全面に塗布されていた可能性がある。 赤褐色 を呈し胎土は良く精選され焼成も堅緻である。16 は口径 8.3 cm を測る壺の口縁であるが、内外面 ともヨコナデを施す。17 は胴部のみであるが、最大胴径 14.3 cm、現存高 10 cm を測る。頸部よ り胴中位にかけては、細い刷毛状具による横位のナデ、胴部より底部にかけては、粗い箆削りを 中位近くでは横位に、また底部近くは右下り方向の箆削りを施している。内部では巾約5mm 前 後の節先状のもので横位に搔き取り、底部より中位までは同様工具で渦巻状に搔きあげているよ うに観察される。内面には粘土紐の巻き上げ痕が残る。淡灰褐色を呈し、胎土には径1~2mm の 砂粒をやや含むが、 焼成は堅緻である。 18 は最大胴径 9 cm を測る小形の胴部のみの破片である。 外面では頸部は横位のナデ、胴部には粗い削りを斜方向、横位に施している。内面の調整は雑で、 刷毛状具による弱いヨコナデを施すが、粘土紐の接着痕が明瞭に残る。灰褐色を呈し、胎土には やや多くの砂粒を含み、焼成は普通である。なお頸部より胴部にかけては黒斑が認められる。19 は胴部に径1cm 前後の孔を有する 鴎形のものであり、胴径12cm、現存高4cm を測るものであ る。胴部では粗い刷毛状具による縦位、右下りのナデを、また胴下部では弱い箆磨きを施してい るようである。内面は指頭ナデか、箆先状のもので横位にナデを施す。指紋が認められる。灰褐 色を呈し、胎土は良く精選され、焼成は良い。壺は本遺跡では非常に少ないといえる。15・16・ 17 のように中形のもの 18 のようにやや小形のもの 19 のように 慇形のものがある。概して中形の



ものは造りも丁寧で、焼成・胎土も良好なのに比して、小形のものはやや劣るようである。

坏 (第12図 20・21)

20 は口径 11.4 cm、最大径 12.4 cm、器高 6.2 cm を測るものである。やや尖った底部よりやや外反しながら、器高¼程度のあたりより内湾し先細り口唇にいたる半球形に近い形となる。調整については、器面の磨耗のために観察不能である。21 は口径 10.0 cm 前後に復元できる細片である。口縁端部が外側にくびれるものである。坏体部には櫛状具(8単位)の刺突が一周する。内面では粗い箆削りが施されているようであるが、内外面ともに炭化物の付着が甚しく観察不能である。

甑 (第12図 22~24)

22 は底部に径 6 cm 前後の穿孔があり甑の底部片とみられる。外面では粗い縦位の刷毛状具痕が認められ、内面では粗い不定方向の削りののちナデを施すようである。茶褐色を呈し、胎土には粗砂粒を多く含み、焼成はややあまい。23・24 は把手の部分であるが、23 は茶褐色を呈し、胎土には粗砂粒を多く含み、焼成もややあまい。表面の磨耗が甚しい。24 は器壁約 8 mm の本体に貼り付けた把手部分の破片である。整形は手捏ねに近く器壁との装着部分には刷毛状具によるナデ痕が認められる。灰褐色を呈し、胎土には粗砂粒を多く含み、焼成は普通である。

底部 (第12図 25~29)

25 は底径 7 cm、現存高 4 cm を測り、底部はほば平底であるが、やや中央部で浅く凹む。外面は磨耗のために観察不能である。内面では指頭による円板を手捏ね風に造り、胴部へは底部より粗い刷毛状具により渦巻状のナデを施す。乳灰色を呈し、胎土は良く精選されているが、焼成はややあまい。26 は底径 2 cm 前後の尖り底に径 1~1.3 cm の焼成前の穿孔がある。外面では粗い篦削り、内面では、篦先か指頭により掻きあげたのち、非常に細い刷毛状具によりナデを施す。茶褐色を呈し、胎土にはやや多くの粗砂粒を含み、焼成は堅緻である。27 は丸底で外面は巾 1.5 cm 前後(10 単位程度)の刷毛状具の胴部へ放射状にのびるナデ、内面底部では篦先により荒く縦横に掻き取り、胴部では粗いヨコナデが施される。灰茶褐色を呈し、胎土には粗砂粒を多く含み、焼成は普通である。内外面に炭化物の付着がある。28 は底径 4.4 cm、現存高 4 cm を測るものである。外面は篦削りと刷毛状具によるナデを施し、底部近くでは多くの指頭圧痕および指紋がみられる。内面は篦先状のもので掻き取り上位は篦削りを施す。灰茶褐色を呈し、胎土には 2~8 mm 大の砂粒を多く含むが焼成は堅緻である。底部には 1.0×0.4 cm 大の紐痕がある。手捏ね的であるが、どのような器形となるか不明である。底部には 1.0×0.4 cm 大の紐痕がある。手捏ね的であるが、どのような器形となるか不明である。底部には 1.0×0.4 cm 大の紐痕がある。手捏ね的であるが、どのような器形となるか不明である。底部には 1.0×0.4 cm 大の紐痕がある。手捏ね的であるが、どのような器形となるか不明である。手捏ねの技法に近いものと推定されるが、通有のものよりは造りは丁寧である。灰褐色を呈し、胎土は良く精選され、焼成はややあまい。

高 坏

出土点数の一番多いものである。完形品は一点しか存せず、身と脚部の離れてしまったものばかりであるので、身と脚部とに分けて説明する。

I 坏部に凸帯を有するもの (第12図 30~32)

いずれも凸帯は粘土紐の貼り付けである。 30 は口径 21 cm、現存坏部高 5 cm を測るものであ る。口唇部近くでは内外ともに刷毛状具によるナデが施され、他の部位についてもナデとみられ るが、外面については一部磨きの痕跡がみられ内面では、かなり粘土の軟らかい間のヨコナデ (粗 い工具)であるが、方向については不定である。胎土、焼成ともに良く外面口唇部近くには黒斑が 認められる。31 は口径 24.3 cm、現存高 5.2 cm を測るものである。器外面では粗い刷毛状具(間 隔 2 mm 程度)による下より上へのナデ上げののちヨコナデか研磨に近い調整で、口唇近くでは 細いヨコナデを施す。内面については、外面の調整と同じく粗い刷毛状具の搔き上げののち、搔 き上げ痕が残る程度の箆磨きを施す。胎土・焼成ともに良好で灰褐色を呈する。30 と同様に外反 して口縁にいたる器形であるが、口唇端部内面で凹み端部を丸くおさめるものである。32は口径 29 cm 以上、現存高 5.3 cm を測るものである。30·31 と同様の器形とみられるが、ややそれらに 比して器肉が厚い。内外面とも刷毛状具によるヨコナデののち箆磨きを施しているが、口唇近く の巾 2 cm 程度の内外面には明瞭にヨコナデの痕跡が残る。 灰褐色を呈し、 胎土、 焼成ともに良好 である。これら三点はいずれも坏体部に貼り付け凸帯をもち、調整においては精粗の差はみられる が、刷毛状具によるヨコナデののち箆磨きを施し、口唇端近くには刷毛状具によるヨコナデ痕を 残し、それぞれに共通点が見い出される。32についてはやや外面の調整、端部の処理に差異が認 められるが本類で扱った。

II 坏部に明瞭な稜を有するもの (第12、13図 33~37)

33 は口縁 部および 脚部を欠損するものであるが、 稜帯で径 9.3 cm、口径 20 cm 前後のもので 外面は刷毛状具によるヨコナデのあと、箆磨きを施している。脚部との接合部近くでは、粗い刷 毛状具による搔き上げ痕がそのまま残る。内面については第一次調整は不明であるが、最終段階 は箆磨きである。 灰褐色を呈し、 胎土は良く精選され焼成はややあまい。 34 は稜線部位での径 13 cm、口径 20 cm 前後の坏部から脚部の破片であるが、外面稜線帯より下位では巾 1 cm (9 条)程 度の刷毛状具によるナデ上げ痕がそのまま残り、稜線は指頭ナデにより造り出される。内面は外 面と同様、刷毛ナデのあと箆磨きを施すが、内底面では放射状に施されたナデがそのまま残る。 色調は乳褐色を呈し、胎土・焼成ともに良い。35 は稜線部位での径 11 cm を測るものであるが、 稜線より下位では箆削りに近い箆磨きと、刷毛状具による搔き上げとの両者がみられるが、前後 関係については不明である。内面については器表が荒れて不明の部分が多いが、粗い箆磨きが施 されている。36 は稜線部位での径 11 cm を測るものである。稜下位では炭化物の付着が甚しく判 然とし難いが、刷毛状具による搔き上げののち箆磨きを施しているようである。内面は平滑な箆 磨きで仕上げる。37 は稜線径 9 cm を測るものであるが、稜線下位では細い刷毛による搔き上げの のち、粗い箆磨きを施す。内底面も同様刷毛ナデののち磨きを施しているようであるが判然とし ない。坏底部と身の接着痕により稜をなすものである。本類には 33・34 のように明瞭な稜を引き 出したものと35~37のように坏底部と坏身の接着により生じた稜との二種が存する。前者の調整 は概して良く、後者においては最終段階の研磨も粗雑である。

III 坏部にゆるい稜をなすもの (第13図 38~43)

38 は口径 15 cm、現存高 5 cm を測るものである。内外面とも磨耗が甚しく不明である。39 は口径 16 cm、現存高 5 cm を測るものであるが、外面は削りに似た粗い箆磨きを施し、内面は刷毛状具によりそののち箆磨きを施しているようであり、内底面には明瞭に残る。40~42 はそれぞれ口径 17.8 cm、22.2 cm、19.6 cm を測るものであるが、器表面の磨耗のために調整技法等については不明である。概して胎土・焼成は悪く、ともに坏底部と坏身の接着部位はナデにより消去し、その位置で外傾度が変換するためにゆるい稜をなすものである。

IV 通有の椀形の坏部を有するもの (第13図 44~47)

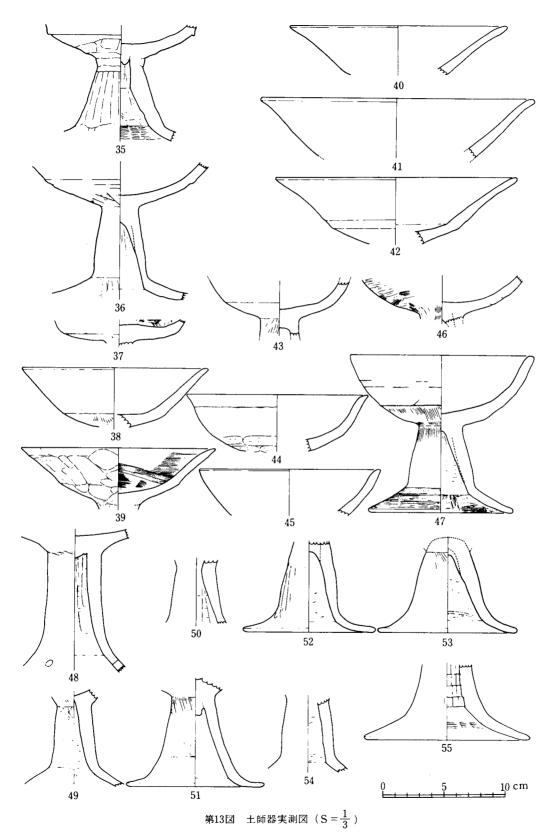
44 は口径 14.8 cm、現存高 4.6 cm を測るものであるが、坏部外面は箆磨きを施すが、口唇近く では刷毛状具によるヨコナデ痕を残す。また粘土紐の継ぎ目痕がみられる。内面においても口唇 近くでヨコナデ痕を残す、他は丁寧な箆磨きを施す。灰褐色を呈し、胎土・焼成ともに良い。45 は口径 14.8 cm、現存高 3.8 cm を測るが椀形を呈する胴部より口縁近くでやや外傾を変え内湾 気味を呈するものである。外面は箆磨きによるが、口唇近くでは巾 2 cm 程度にわたり細いヨコナ デを施す。内面については磨耗のため観察できないが、おおよそ口唇近くにヨコナデを残し、他 は平滑な箆磨きを施すものとみられる。46 は坏底部のみの破片であるが、外面底部近くでは刷毛 状具によるナデ上げ、坏部では水平方向の単位の短い (約1~2cm) ほぼ水平方向の深いナデの のち、両者ともに箆磨きを施している。内面は箆削りにより平滑に仕上げられている。47 は唯一 の完形品で口径 14.8 cm、器高 13 cm、底径 11.4 cm を測るものである。まず坏部より見てゆくと 44・45とほぼ同様の椀形を呈する器形で、脚より底部にかけては粗い刷毛状具により(5条)搔 き上げに近い形で、坏部との接合痕を明瞭に残し、坏部はヨコナデのままに近く若干の箆磨きを 施す程度で粘土紐の継ぎ目痕を数ケ所に残す。内面は不定方向の細い刷毛ナデのあと箆磨きを施 すが雑である。胎土にはやや砂粒を含むが焼成は普通である。脚部については脚の分類の項で述 べるのでここでは省略することとする。本類は椀形を呈する坏部に脚部を付すものであるが、内 外面ともに箆磨きを多用し、調整等についてもII類の 33·34 のように良好であるが、やや粘土紐 の継ぎ目痕を残すという粗雑さはある。

高坏 (脚)

I 脚部が筒状に長いもの (第13図 48)

脚胴部径 4.2 cm を測り、筒状に長く裾部に向って外展するものと思われ穿孔がみられる。坏部・脚部ともに篦磨きを施すものとみられるが、器表面の磨耗のために判然とし難い。しかし坏部と脚部境では篦磨きの際に生じたとみられる篦先の痕跡が認められる。脚内面にも丁寧な篦削りを施している。灰褐色を呈し、胎土には細砂粒が多く含まれ焼成は普通である。本遺跡出土遺物の中では類品はなく唯一ものである。

II 脚の筒部と裾部がゆるやかに接続するもの (第13、14図 49~56)



— **33** —

49は外面に右下りの粗い刷毛ナデのあと、粗い縦方向の箆磨きを施す。内面では上位 2.5 cm 位 にはしばり目を残し、あとは丁寧な横位の箆削りを施す。50 は器内外面磨耗のために不明の点が 多い。51 は底径 10.6 cm、 脚高 7.5 cm を測るものである。 脚部には細い刷毛状具による縦ナデの のち粗い磨きに似た縦ナデを施し、裾部は刷毛状具によるヨコナデのみである。脚内部は時計回 り方向の箆削りを丁寧に施し、裾部近くは刷毛状具によるヨコナデのままで、端部は丸くおさま る。52 は底径 10.2 cm、脚高 7.5 cmを測るものであるが、判然としない。 内面は丁寧な箆削りによ りしぼり目を搔きとり、裾部は刷毛状具によるヨコナデののち若干箆磨きを施しているようにみら れる。胎土は精選され黄灰色を呈し焼成も良い。53 は底径 11 cm、 脚高 6.6 cm を測るものである。 外面脚上部に粗い刷毛状具の痕跡、裾部近くでは箆磨きの痕跡が残る。通常の刷毛状具のナデの のち箆磨きを施すものとみられる。脚上部には、坏部との接合痕が認められる。内面は粗い箆削 りが施され裾部は刷毛状具によるヨコナデのままである。15 は器表磨耗のために判然としない が、内面の箆削りは丁寧である。55 は底径 13 cm、脚高 6.3 cm 以上を測るものである。外面は脚 部では巾約5mm 前後の箆先により上から下への磨き、裾部では同様におおむね横方向の磨きを 施している。内面脚部では、5段の粘土紐の時計回り巻き上げ痕に加えて、しぼり目をそのまま 残す。裾部中位では粗い刷毛状具(5条以上の櫛状具に近い) により 1~1.5 cm の長さで区切り 連続して施し、端部近くは横位の箆磨きを施すがやや削りに近くみえる。橙灰色を呈し、胎土に は粗砂粒をやや含むが焼成は良い。56 は筒部のみの破片であるが、外面では巾 0.5~1 cm の縦方 向の箆削りののち、やや右下りの擦痕が認められることから、再調整を施している可能性がある。 内面では時計回り方向の箆削りを施している。本類は 51・52 にみられるように脚筒部との境界が ゆるやかに接続し稜をもたないものを集めたのであるが、49 はやや筒部が細くまた長目であるこ とと内面の径も小さく、外面の整形でも右下りの刷毛状具のあと、箆磨きを施すということでや や異にする。54・55・56についても筒部の径の大きさ、55のように内面にしぼり目、粘土紐の巻 き上げ痕をそのままに残すということで本類の代表的なものではない。

Ⅲ 脚外面筒状部と裾部との接着部分で稜をもつもの (第14図 57~62)

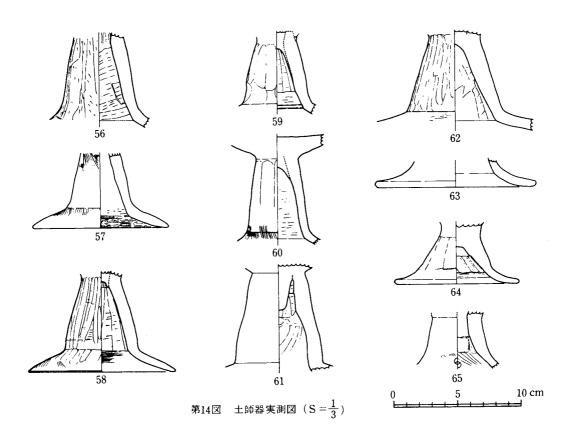
57 は底径 10.4 cm、脚高 6 cm 以上を測り、外面筒部では縦方向あるいは右下り方向、裾部では縦位の刷毛状具による粗いナデのあと箆磨きを施しているが定かではない。裾端部近くではヨコナデもみられる。内面筒部では箆削り、裾部では刷毛状具によるヨコナデを施し筒部と裾部では明瞭な稜をなす。58 は底径 11.4 cm、脚高 7.6 cm を測り、外面では筒部に粗い刷毛状具(櫛に近い)による横位のナデ、裾部では同具による縦位のナデの一次調整ののち筒部では縦位の箆磨き、裾部では横位のヨコナデを施しているものとみられる。内面筒部では逆時計回りの箆削り、裾部では巾1.5 cmの軟らかい刷毛状具によるヨコナデを施す。57・58 ともに茶褐色を呈し、胎土も良く精選され、焼成も良い。59 は、外面に粗い刷毛状具による左下りのヨコナデののち、巾広な箆磨きを施す。内面には逆時計回りの箆削りがみられる。60 は外面に左下りの粗い刷毛ナデのあと巾広な縦位の箆磨き、裾部では刷毛状具による縦位のナデがわずかに認められる。内面は、逆時計回

りの荒いヨコケズリを施している。61 は筒径が大きく外面は、細い右下りの刷毛ナデのあと、縦方向の箆磨きを施す。脚内上部は横位の箆削り、胴部では箆先か指頭により渦巻状に搔き取りをし、内外面ともに明瞭な稜を有する。62 は外面に巾 6 mm 前後の縦位の箆磨きを丁寧に施し、内面では箆削り、裾部では横削りである。本類の代表とされるものは 57・58 であるが、焼成・胎土ともに良く脚筒部と裾部の接着部位で明瞭な稜をもつ。61・62 はともに大形に属するが、内外面に明瞭な稜をもつことから本類に含めた。

IV 脚高の低いもの (第14図 63・64)

63 は裾部のみの破片であるが、底径 12 cm を測り内外面ともに磨耗が甚しく、調整等についてはわからない。64 は底径 9.2 cm、脚高 4.2 cm を測り坏部と脚部の境界よりゆるやかに外反しながら、端部を丸くおさめるものであるが、外面は粗い刷毛状具による縦位のナデのあと、同じく縦位の箆磨きを施し、端部近くでは刷毛状具のヨコナデのままである。内面は箆先か指頭による掻き取りに近く、端部近くはヨコナデである。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み焼成は良い。造りは全体に雑である。本類で全形の窺えるものは 64 の一点のみである。

V 脚部に透孔をもつもの (第14図 65)



65 は内外面ともに磨耗が甚しく判然としないが、外面は縦位の刷毛状具痕、内面筒部では箆削り、裾部にかけては粗い右下りの刷毛ナデなどが、わずかに観察できる。透孔も何個穿れているのか不明である。 48 の他は透孔のあるものは本例一点のみである。

(3) 須恵器

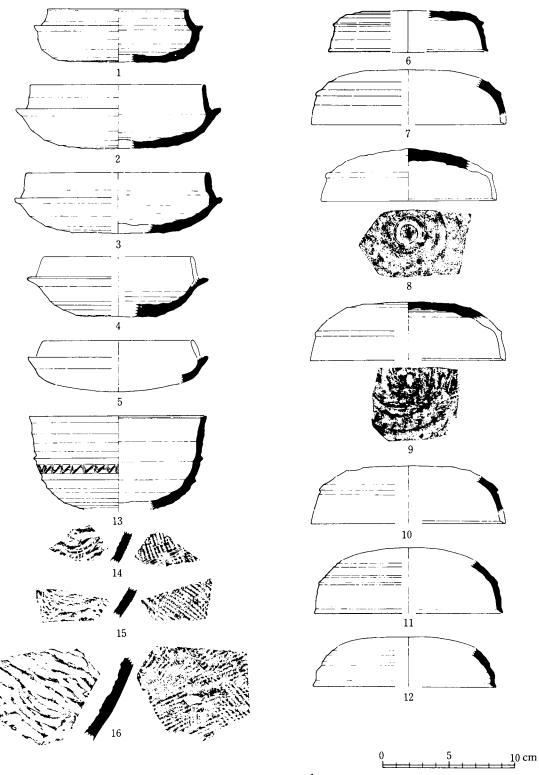
第1・2次 調査であわせて坏身 7点、坏蓋 20点、無蓋高坏1点、甕胴片 9点、不明 2点の以上 39点が出土している。以下、形態によって若干遺物の特徴等について記述する。

1 坏身 (第15図1~5)

1は全体の約½程度の破片である。口径 10.6 cm、器高 4.0 cm に復元できる。焼成は良く器表は灰黒色を呈し、器肉は茶褐色、胎土も良く精選されている。器外面は受部一段下より箆削りを始め底部全面に平滑に施す。他の内外面は刷毛状具によるヨコナデ調整のままである。腰部(胴部)がよく張り、口縁端部も平滑水平に仕上げられている。底部外面には箆記号の痕跡が認められる。2 は口径 13 cm、器高 4.9 cm に復元できる約1/3程度の破片である。受部よりやや下った腰部より箆削りを始め底部に至る。箆削りは荒っぱく、その他はヨコナデ調整のままの未調整である。立上り部分は薄くやや内傾して端部は丸くおさまる。焼成は普通、胎土にはやや多くの粗砂粒を含む。 3 は口径 9.6 cm 以上、器高 4.5 cm に復元できる約 1/5 程度の破片である。受部よりやや下った腰部より箆削りを始め底部に至る。他の残された部位はすべて刷毛状具によるヨコナデ調整のままである。受部の器肉も厚く、立上りも内傾し中位より直立し端部は丸くおさまる。焼成は普通、胎土には多くの砂粒を含む。 4、5 は細片であり、口径、器高等は不明であるが、受部より胴部のものである。やや底部の器肉が厚く、胎土には砂粒を多く含むが、器形は 2 に近いものと推定される。5 は受部と腰部の細片であるが焼成・胎土は良く5 と同様に 2 に近い器形をなすものと想定される。

2 坏蓋 (第15図6~12)

坏蓋とみられる破片は総数 20 点と第 1・2 次調査では一番多い器種である。 6 は口径 12 cm 前後、器高 3.0 cm に復元できる細片である。天井部は箆削りによって平滑に仕上げられ、口縁端部は平滑におさまる。天井部を除くその他の部位は刷毛状具のヨコナデ調整である。胎土も良く精選されまた焼成も良い。色調は灰黒色を呈し、天井部に若干自然釉がかかり器肉は茶褐色である。他に同一個体とみられる口縁端部片一点がある。 7 は細片であり全形は不明であるが胎土には砂粒を多く含むが焼成は良い。 8 は天井部のみの破片である。天井部では粗い箆削りが施され、逆時計回りの痕跡が残る。色調は灰青色を呈し、天井部には自然釉がかかり胎土にはやや砂粒を含む。 9 も同様に天井部のみの破片であるが、天井部には粗い箆削りが施され逆時計回りの痕跡が残り、内面は刷毛状具によるヨコナデ調整であるが、内面タタキの痕跡が残る。色調は灰青色を呈し胎土には砂粒をやや含み天井部にはゴマシオ状の降灰釉がみられる。10 は体部のみの細片である。11 は口径 14 cm、器高 4 cm 以上に復元できる。残存する器内外面ともに刷毛状具によるヨコナデ調整のみで体部の稜もやや明瞭さを欠失し、焼成はなま焼けに近く、黄褐色を



第 15 図 須惠器実測図 $(S = \frac{1}{3})$

呈し胎土には多くの砂粒を含む。12 は口縁端部の破片であるが、二段に屈曲する歪小な端部で終わる。色調は灰黒色を呈し焼成は良い。

3 無蓋高坏 (第15図 13)

無蓋高坏の身の部分約 1/4 程度の破片である。身の部分は口径 13.4 cm、器高 7.1 cm に復元できるものと思われる。坏体部には上下を明瞭な稜線で区画し、櫛状具 5 本以上により櫛描波状文が横位にめぐる。その下段の稜線より底部は箆削りで他はすべて刷毛状具によるヨコナデである。脚部には降灰釉がかかる。胎土は良く精選され、器肉は茶褐色を呈する。14~16 は甕胴片である。

第11節 石 器

第1・2次調査で出土した石器は7点である。他に剝片が数点存在するが、比較的大形のものを掲載した(第16図)。1は長楕円形の礫の両端を敲打して打ち欠き、両面にも敲打で凹みを作っている。側縁の片方を磨き刃部としている。この刃部の存在から擦り切り石器の1種であろうとみている。2、4は石皿の破片と推定されるが、3は石皿と対をなす磨石の破片であろうと推定される。全面にススが付着して黒色を呈している。5も擦り切り石器の破片で、表面を敲打で薄くした後に磨きを加えている。厚さ4~6mmで、幅2~6mm程度の刃部を作っている。1と比べると薄手のものである。6は円礫を使用した凹石で、側縁に敲打痕が認められる。同一石器で凹石と叩き石に使用したのであろう。7は長楕円礫を使用する礫石錘で、両端を打ち欠いている。8は頁岩の剝片で、石鏃等作成時に剝離したものであろう。9~11は緑色凝灰岩質頁岩で、表面に敲打による剝離痕が存在する。玉類製作の石質と同質である。

第 16 図 12 は、長さ 1.9 cm、〈 びれ部巾 0.7 cm、厚さ 0.38 cm、重さ 1.8 8 を測る勾玉である。 頭部には径 0.2 cm を測る穿孔がある。材質は不明であるが、黒褐色を呈する硬質のものである。 黒灰色粘土ブロック中より、第 12 図 5 の土師器などと伴出したものである。

第Ⅲ節 木製品

第 17 図の 1 は上面で 16.5×31.0 cm、底面では 22.0×32.5 cm を測り断面は梯形を呈し、一端に径 $3.4 \sim 2.2$ cm、長さ 11.5 cm の把手と思われるものを造り出す。表面には、ノミ状工具痕が明瞭に残り使用痕(擦痕)もまた明瞭に認められる。遺存状態は非常に良く、材質は杉材と思われる。第 12 図 5 などとともに黒灰色粘土ブロックから検出したものである。

第17図2は角材状のもので、長さ59 cm 以上、幅7.5~5.9 cm、厚さ4 cm を測る。表面は水平に加工され、先端は斜に切断されている。第18図1は角材状のもので、先端を削り鋭利にしている。基部は切断されている。幅5~5.5 cm、長さ16 cm 以上と推定される。第18図2は糸巻き状のもので、中央部を抉り込んでいる。第18図3も角材状のもので、長さ11.5 cm 以上、幅4 cm、厚さ2 cm を測る。第18図4は2次的加工を有する木片で、下端をノミ状工具で抉っている。第

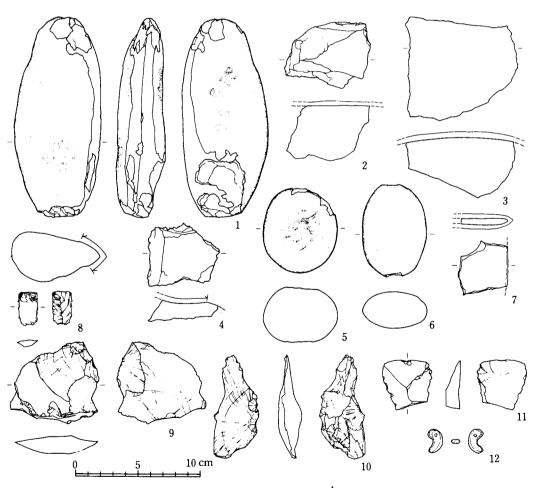
18 図 5 は断面三角形のもので、残存部の両端をU字形に抉っている。第 18 図 6 は断面隅丸三角形で、長さ 19 cm 以上、幅 3 ~ 3.5 cm、厚さ 1.8 cm を測る。第 18 図 7 はやや板状の中のもので、ノミ状工具で 2 ケ所抉り込んでいる。

第IV節 自然遺物

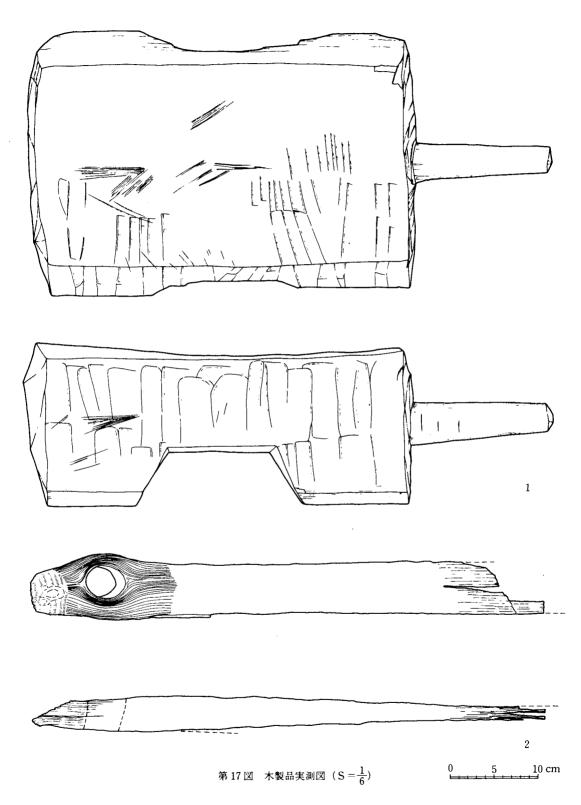
自然遺物は第 $1\cdot2$ 次両調査時に出土したが、第2 次調査時のA'-22 区中央部の凹みに、暗灰色砂粒中に含まれて約40 cm×約30 cm の範囲で、胡桃・栗・栃の実等が一塊りとなって出土した。(図版4 参照)

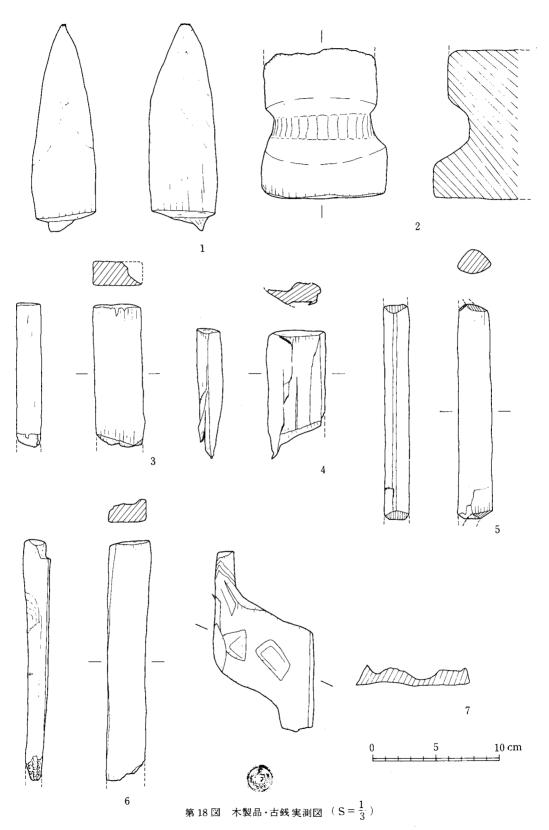
第 V 節 古 銭

第2次調査時に「寛永通宝」が1点出土した(第18図)。



第 16 図 石器実測図 $(S = \frac{1}{3})$





- 41 -

第♥章 ま と め

犀川鉄橋遺跡は、国鉄北陸本線犀川鉄橋と北安江八日市線の大豆田大橋間の犀川河道内一帯に 拡がっている。行政区画では、金沢市大豆田本町と同市本江町に含まれている。

本遺跡が発見された切っ掛けは、昭和47年7月、当時の金沢市立泉中学校生徒が、犀川鉄橋下流の河原に露出していた粘質土層から縄文晩期の土器片を採集した事である。この遺物をはじめて報告したのは、故沼田啓太郎氏である。

今回の第1・2次調査でも、縄文時代から古墳時代にかけての遺物を検出できたが、調査の結果、これらは上流より流出してきて再堆積したものと判明した。以下、簡単なまとめと若干の補足説明を加えてゆきたい。

(1)縄文土器

今回の調査で出土した土器は、前期末から中期初頭頃のものと後期後葉から晩期中葉までのものとに大別される。

前者は、木目状撚糸文を施した深鉢胴部片である。明確な型式名は不明である。本遺跡周辺でこの文様を持つ土器が出土している遺跡には、犀川上流右岸の笠舞A遺跡(註1)、同左岸の中平遺跡(註2)、同七兵衛平遺跡(註3)が存在する。本遺跡のものは全体に磨滅して丸味があり、上流の遺跡から流れてきたとするのは極端にしても、ある程度遠距離からもたらされたものであろう。

後者は、細片であるが比較的多かった。この期の土器編年は、昭和 20 年代以降、故山内清男博士の指導の下、石川の高堀勝喜氏、沼田啓太郎氏、富山の湊 晨氏、小島俊彰氏等の研究に負う所が大きい。現在、後期後葉に井口II式(註 4)、晩期前葉の石川には八日市新保式(註 5)、富山には岩瀬天神式(註 6)、勝木原式(註 7)が、この勝木原式の流れの中から御経塚式(註 8)が出現し、中葉に中屋式(註 9)が設定されている。さらに近年富山東部の本江遺跡の後期中葉から後葉の充実した土器群が紹介され(註 10)、この土器群を使用して後期後葉の井口II式から晩期の八日市新保式にかけての編年案も論考として発表され(註 11)、北陸の中の地域性の問題も次第に注目されつつある。

さて、後期後葉でもその終末頃のものとされるものに第6図14が存在する。条痕地文上に平行 沈線を周らし、弧線で切る手法である。この弧線(状)のものは、すでに富山県田家遺跡の特徴 とされ、小島氏は地域性を考える上で田家型として捉えておられる(註12)が、平行沈線を弧線 で区切るのとは異なるのが特徴である。全体の器形が窺えないので不明であるが、時期は若干新 しく考えることはできないだろうか。

石川の晩期前葉初頭に八日市新保式が設定されている。第6図に掲載したいわゆる精製の有文 土器と第8・9図のいわゆる粗製土器のいずれかのものが伴なうものであろう。この型式のメル ク文様は、三叉状連結文(別名山字状三叉文)と連結三叉文である。前者の文様は波状口縁部の 波頂部に、後者は波状口縁と平縁の深鉢口縁部と浅鉢や椀等の口縁部文様に施され、まれに波状 口縁の深鉢の波頂部に施されることもある。

この型式は器形的にも文様的にも後期後葉井口II式からの伝統を受けつぐもので(註 13)、器面は丁寧にヘラミガキされ、文様も沈線文のみで(第6図1~11、14~16)、沈線間に列点を施すもの(第6図10·11·15)や、縄文を施すもの(第6図12)なども存在する。沈線の数も先の尖ったヘラ状具で3~5条施される。波頂部に施される三叉状連結文(第6図2~4)や連結三叉文(第6図1)にも沈線と同様な施文具でなされているが、第6図2の縦方向の軸は長く、典型的ともいえる形のもので、浅く抉った後にヘラ状具でミガキを加えている。文様自体の形態にも違いが認められる(註 14)。2類(第6図13)のものは小形の波状口縁の鉢であろう。

これらの深鉢類に対応する器種として浅鉢と椀等が存在する。 3 類とした浅鉢は、口縁部の形態により直立、内湾、内屈のタイプのものに区分できるが、その文様のモチーフは、①沈線や縄文で上下を区画した内部に、横位に連結三叉文を連続さすもの(3 類 a、c~g、第6 図 17・18~25)、②沈線を横位や斜位に施し、その囲まれた三角形や四角形の空間内を抉るもの(3 類 b、第6 図 18) の 2 つに区分できる。施文具は縄文の原体の他に先の尖ったヘラ状具で、①においては連結三叉文の連結した沈線(軸)は太く、その上下の沈線(弧線)が細いことも特徴である。連結三叉文をさらに長方形の沈線区画の枠内に施す 3 類 a(第6 図 17)や、器形は外反する 3 類 h(第6 図 27)も①のタイプの文様に含められるものである。器種、器形ごとに文様を変化させているものである。

浅鉢でも口縁部の幅が狭く直立する 3 類 (第 6 図 28) は、先が丸味を持った棒状具で施され、本遺跡では出土していないが、波状口縁の深鉢にも見られる文様である。口唇部肥厚の浅鉢も、肥厚部に縦位の粘土紐と連結三叉文を施している。以上の有文精製土器の文様は、口縁部と胴部の平行沈線を縦位の短線で区切る手法から発展した連結三叉文が主体で、縄文の使用が限定されている革新的な土器型式である。

この石川に主に分布する八日市新保式に対して富山方面に主分布域を持つものに岩瀬天神式や勝木原式が存在する。前者の岩瀬天神式は出土しておらないが、後者の勝木原式のものとして第7図1、2が存在する。メルク文様は玉抱き三叉文で同時に縄文も使用しているのである。器形も波状口縁であるが八日市新保式の如く複合口縁でなく頸部からゆるく外反し、波頂部の形態も角ばった台形型を呈している。この勝木原式に後続するのが御経塚式である。

御経塚式とされるものは第7図に掲載したもので、メルク文様は単独三叉文である。指標となる器形も波状口縁の深鉢で、波頂部も角ばり文様も幅広の沈線と単節か無節の縄文が内外面に施される(1類a~d、第7図3~6)。この様なタイプの他に外面に条痕調整を施した1類e(第7図7)が出土している。あまり例を見ないが、器形と内面調整のあり方から本型式の中に含めておきたい。平縁の深鉢の2類(第7図9~12)も内面に幅広の浅い沈線がめぐらされている

点から本型式に含めたい。

以上の深鉢類に対応する器種として浅鉢や椀等のものも存在する。器形的な面よりも文様的な面で注意したい。先ず、波状口縁の浅鉢(第7図8)の如く、内外面ともに口縁部の沈線と三叉文が結合した様な(三角形の抉り込み状の)文様が施されている。これは浅鉢か椀のいずれかと推定される第7図13·15の如く区画の沈線に小さく三角形の抉り込みを有するものが存在するが、器形が異なっても文様の単位性に共通性があり、器種の文様の単位構成の中でさらに変化させたものであろう。(註15)。施される縄文にしてもL $\left\{ egin{align*} R & R \\ R & C \\$

粗製土器

これらのものには条痕、縄文〈単節、無節〉、無文の各タイプものが存在し、数量としては条痕 文が多く、以下縄文、無文の順である。先ず条痕文から説明したい。口縁部の破片は少な〈胴部 片が多い。器形は全体に外反ぎみに立ち上がるものが多く、口唇部をヘラミがキしたり、指ナデ 調整するものである。ただ、4類a(第8図4)としたものは、頸部で〈びれて外反するタイプ のものであるが、中屋式の如〈三角の抉りの代りに棒状具による圧痕であり、内面に幅広の浅い 沈線を施している。内面の特徴からして御経塚式としておきたい。さらに精製土器における中屋 式の僅少さからしても、これらの条痕文は中屋式以前の御経塚・八日市新保式の段階のものと考 えておきたい(註 16)。

無文土器は内外面ともヘラミガキされ、口唇部に指頭圧痕を有する(第9図24·25)ものや、 胎土の色調が接合部で異なるもの(第9図19)も存在する。

補修紐を有する土器

第9図14は器面にL { r の無節縄文を施した粗製深鉢である。口縁部に補修用の孔があり、外面側に補修時にしばった撚紐が残っている。石川県内では初めての検出である。県外では福井県鳥浜貝塚 (註17) や滋賀県滋賀里遺跡 (註18) のものが有名であるが、この種の土器について千葉市加曾利貝塚博物館学芸員庄司克氏より、使用時に破れても補修孔を穿ち紐で縛り煮汁をつければ、汁が浸み込み、破れ口を閉ぎ使用に耐え得るとの御教示を頂いた(註19)。現にこの土器は外面にススが厚く付着し、洗浄後ススが剝離した部分から発見されたもので、補修後も煮沸に使用したことを物語るものである。

(2)土師器、須恵器

第1次・第2次調査で出土したもののうち数点を除けば、(第 11 図 1 の甕は弥生後期猫橋式頃の ものであろう。また、第13図48の高坏脚部も弥生後期頃のものか。)そのほとんどが古墳時代に 属するものである。本期に類する遺跡を県内で見てみると多いとはいえないが、管見に入ったも のを見てみると、平地の遺跡では、金沢市高畠遺跡、辰口町高座遺跡、七尾市寺家干場遺跡、志 賀町倉垣遺跡、同町中村畑遺跡、鹿西町金丸宮地遺跡、富来町高田遺跡などがあり、一方、古墳 では辰口町茶臼山古墳群などがあげられる。金沢市高畠遺跡では、土広墓群の検出とともに、口 唇部内面に肥厚帯をもつ、「く」の字口縁甕形土器 (布留式土器)、有段口縁基部に稜帯をもつ壺、 甕類の盛行する時期にあたり「高畠式土器」として定着しつつある。また、報告者(橋本澄夫氏) は五世紀前葉に中心をおくものと考えておられる。また、辰口町高座遺跡では方形周溝遺構、溝 跡に伴って多量の土器類が検出されている。中でも方形周溝遺構からの遺物類が良好な一括資料 といえる。中でも、小形丸底壺が多く、また胴部の形態はバラエティに富んでいる(球形になる もの、算盤玉をなすもの、扁円形をなすものなど)。有段口縁また口唇内面の肥厚する「く」の字 口縁甕、脚部が直線的に外反する高坏形土器、器台形土器などが出土しており報告者(中島俊一 氏)は、宮地式土器に近似するが、若干先行する時期を想定している。また、七尾市寺家干場遺 跡では、集落遺跡と考えられるが、採集された土器では壺形土器、甕形土器、坩形土器、高坏形 土器、器台形土器などがあり報告者 (谷内尾晋司氏) は甕内面の箆削りが、全くみられないこと、 口唇部の肥厚する甕の喪失、高坏における坏底部 の口縁部 境界の不明瞭なことなどから、宮地 式土器でも須恵器の伴なわない時期のものとしている。また、志賀町倉垣遺跡の大溝からは、甕 形土器、壺形土器、高坏形土器と供伴関係は不明であるが古式の須恵器が伴出しており宮地式に やや先行するが、ほぼ同時期とみられる。鹿西町宮地遺跡では、小規模な調査のわりには、良好 な遺物が検出され宮地式土器の設定と相俟って、北陸の古墳時代中後期土器編年の基礎をなして いる。高坏形土器(3類)、器台形土器、坏、坩(小形丸底坩)、壺、甕形土器、石製有孔円板な どがあり、報告者(吉岡康暢氏)は、大阪府小若江南遺跡の高坏の一部に類縁性が認められるこ と、また同船橋遺跡 0 – II ないしIII群、浜寺石津遺跡 II 式、岡山県高島王泊遺跡第四層の高坏形 土器の成形技法に共通性がみられることなどから、西暦 400 年前後の年代観を示されている。なお、 最近の調査例としては志賀町中村畑遺跡のB地区大溝下層出土の一括資料が報告されている。報 告者(谷内尾晋司氏)は、従来の吉岡編年に準拠し、また畿内および関東の諸資料、先に記述した辰 口町高座遺跡方形周溝遺構出土の資料から5世紀中葉から6世紀初頭の年代観を与えている。本 遺跡出土の須恵器、土師器は遺構に伴ってのものではなく多くを述べることはできないが、土師 器甕類では 第 11 図 3 ~ 5 は口縁内面が肥厚するタイプで布留式土器の範疇におさまるものであ る。また、いわゆる「く」の字口縁を有する第 11 図 6 ~13 は布留式土器の新段階のものと大阪府船 橋遺跡 0 −III・IV期に併行するものとがみられる。第 12 図 15,16 は、いわゆる小型丸底壺に近 いもので、金丸宮地遺跡A群土器中に見受けられるものである。また 高坏(第 12 図 30~34、第

13 図 35~47) では、坏部に稜をもつものと、無段のものが含まれ宮地式土器とそれに後続するものがみられる。一方、須恵器を見てみると、断片的な資料ばかりであるが、第 15 図 1 、6 、13 は中でも古式を呈し、田辺編年の T K 208 から T K 23 にかけてのものとみられ、また中村編年の1型式 3 段階に属するものとみられる。他は、田辺編年のMT 15 までのものが含まれるものとみられるが、細片が多く断定はできない。以上のことを総合してみると、志賀町中村畑遺跡 B 地区大溝下層出土資料に最も近い年代が考えられ、5世紀後半から6世紀前葉にかけてのものが大半を占めるものと推察される。

(3)石 器

石器は形態的に擦り切り石器 (第 16 図 1 · 5)、石皿 (第 16 図 2 · 4)、磨石 (第 16 図 3)、 四石 (第 16 図 6)、礫石錘 (第 16 図 7)、石器製作時に出た剝片 (第 16 図 8)、玉製作時に出た 剝片 (第 16 図 9 ~11)、勾玉 (第 16 図 12)に区分される。擦り切り石器については、薄手に作ら れたものは、縄文後晩期の加賀市横北遺跡 (註20) や野々市町御経塚遺跡 (註21) から出土して おり、他の石器と併せて該期の所産と考えておきたい。また、勾玉や玉類製作に伴なって出た剝 片は古墳時代の所産と考えておきたい。

(4)木製品

第17図1のタタキ台様の木製品は、表面を鉄製利器で加工した優品である。その他のものは板 状か角材状木製品の破片である。ただ第18図1は杭の如く先端を削って尖らしている。第18図 2は糸巻状をしている。第18図6は断面隅丸三角形の棒状具で、残存部の両端をU字状に抉っている。第18図7は表面にノミ工具で抉っている。全般的に鉄製工具で加工されており、古墳時代乃至それ以降の所産と考えておきたい。

- 註 1 浅井勝郎 浅井哲夫 「金沢市笠舞遺跡」 石川考古学研究会々誌第 11 号 昭和 43 年 岡本晃 「金沢市 笠舞遺跡」 石川考古学研究会々誌第 18 号 昭和 50 年
- 註 2 沼田啓太郎 「金沢市大桑町中平遺跡報告」 石川考古学研究会々誌第19号 昭和51年
- 註 3 岡本恭一 「金沢市七兵衛平遺跡採集遺物の紹介」 石川考古学研究会々誌第24号 昭和56年
- 註 4 小島俊彰 「東砺波郡井口遺跡出土遺物の紹介」 富山県考古学会々誌大境第2号 昭和41年
- 註 5 高堀勝喜 「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡」 押野村史 昭和39年
- 註 6 湊 晨 「五、縄文後・晩期」 『富山県史 考古編』 富山県 昭和47年
- 註 7 小島俊彰 出崎政子 『富山県高岡市勝木原遺跡 I』 富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブ 昭和42年 註 8 註5に同じ
- 註 9 沼田啓太郎 「旧石川郡安原村中屋遺跡調査略報」 石川考古学研究会々誌第8号 昭和31年
- 註 10 小島俊彰 「本江遺跡」 『滑川市史 考古資料編』 滑川市 昭和 54 年
- 註11 小島俊彰 「井口式土器」 『縄文文化の研究 4 縄文土器II』雄山閣 昭和56年
- 註12 註11に同じ
- 註13 この時期の変遷は、I 期いわゆる井口II式の波状口縁の深鉢は、波頂部は三角形をして断面は肥厚している。この波頂部外面と波頂部下の胴部に、巻貝の先端による刺突と側面による扇状圧痕を施している。沈線は細く深いものと幅広で浅いものが存在するが、細い方が主流である。II 期では波状口縁はやや直立及至内屈ぎみとなり、肩部は水平となってくる。波頂部の上方への突出もやや丸くなり、器壁も薄くなる。波状口縁部

の沈線も一周めぐらされる様になり、波頂部下で沈線を巻貝の側面圧痕で切る手法へと変化する。III期では波頂部が一段と平面的になり、ここを「面」として意識する様になる。この部分に横位の一本の沈線(八日市新保式の三叉状連結文出現を考える上で、祖型的とすべき文様)を施す様になる。波状口縁部と胴部の沈線も細く、一周周らされて波頂部下で一本の短線や三角の抉りで切る手法へと変化する。この段階でも文様帯構成は註14で触れた②と③のものは存在するが、⑤の場合波頂部が低く波頂部文様を施さないものも存在する。この段階の土器文様で、口縁部と胴部の沈線を一本の縦位の短線で切る手法を持つものを、後期に井口式から晩期の八日市新保式への過渡的段階を示すものとして、高堀勝喜氏は滋賀里風と考えておられる。近年この時期の編年について発表されたものに、註11の小島論文がある。氏の見解と共通する部分は多いが、小島論文で図示されている土器21(御経塚遺跡出土。平行沈線をx状の弧線で区切る手法を持つもの)を、筆者の編年観のII期に当てている。この手法自体富山方面に多く存在するもので、時間差や地域差も考慮しなければならないが、波頂部が全体に低く、3段構成の文様帯で縄文を共に施している。また、口縁部文様を施す部分が丸く凹んでおり、筆者としてはIII期に考えておきたい。

註14 いわゆる八日市新保式の波状口縁の深鉢は、前代からの文様帯構成から®波頂部文様、口縁部文様、胴部文様のものと®波頂部文様、口縁部文様、胴部上位文様、胴部下部文様のものに区別でき、®の文様帯構成の器形は横広がりに対して、®は縦長の器形である。この両者が基本的器形になると考えている。®タイプのものは口縁部に施される沈線の数は3及至5条のものが多い。この場合口縁部の沈線は、波頂部下で縦位の短線や三角形の抉りで切るものや、連結三叉文を口縁部に施すものも存在する。が総じて の如く中間の沈線が菱形に抉り込まれる場合が多い。この菱形の抉りがどの様な過程で出現してくるか判然としないが、平行沈線を短線で切る手法からの変化が考えられよう。

八日市新保式の指標である三叉状連結文と連結三叉文の文様形態については、第V章まとめの文中や註 13 でも一部触れたが、施文法からタイプ分けが可能と考えている。①先の尖ったへラ状具で浅く抉り込んだ後、ヘラ状具で内部にミガキを加えるもの(本文中の第6図2)。②は①の抉り込んだだけのもの(第6図3・4)。③施文具の先が丸い棒状具で施すもの(このタイプのものは、深鉢以外では第6図28の浅鉢に存在する。)に区分できる。

- 註15 この三角形の抉りについては、御経塚式の浅鉢形や椀形土器、また、蓋形土器の口縁部文様で、平行沈線の上下から交互に嚙み合う短線やこの短線の先に横位の短線を結びつけたT字形三叉文というべき文様が存在するが、この文様と基本的パターンと共通性を有するものであろう。
- 註16 北陸西部の晩期の条痕文は、西日本から波及して来たとされている。その波及期は判然としないが、後期後 葉の井口II式段階頃と推定している。これが時間的変化と共にいわゆる粗製深鉢に施される様になる。粗製 深鉢にしても、外面調整の手法には先に述べた条痕文、縄文、無文の3タイプのものが存在する。条痕文が 増加するにつれて他のものが減少し、中屋式に到っては条痕文が圧倒的多数を占める様になり、粗製土器の みならず精製土器にも他の文様と共に器面を飾る様になってくる。条痕文が器面調整から器面を飾る文様の 一部として変化して来る過程が考えられる。
- 註 17 森川昌和 「(4)補修孔にヒモの残る土器」 『鳥浜貝塚』福井県教育委員会 昭和 54 年
- 註 18 丹羽佑一 「(4) 遺物の検討 (*) 補修孔」 『湖西線関係遺跡調査報告書』 滋賀県教育委員会 昭和 48年
- 註19 御教示頂いた庄司克氏に感謝する。
- 註 20 湯尻修平他 『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会 昭和 52 年
- 註 21 石川県埋蔵文化財協会職員上庄由美子氏教示。

付章 I 金沢市立泉中学校保管犀川鉄橋遺跡採集土器

ここに紹介する土器は昭和 47 年 7 月に、当時の泉中学校生徒が採集したものである。この土器群については、すでに故沼田啓太郎氏(元石川考古学研究会副会長)により資料報告がなされているが、本報告書を作製するにあたり、同一遺跡から採集された遺物であり、合せて掲載した。

この土器群を報告するにあたり、堀克己泉中学校校長および、中川秀三同校教諭、昭和 47 年当時泉中学校に在籍された荒木澄子教諭(現在金沢市立野田中学校在籍)、石川考古学研究会会長高堀勝喜先生、および同会浅井勝郎・岡本晃先生にお世話になっており、深く感謝の意を表する。

本報告で作成した実測図は泉中学校より借用した土器群で、沼田氏が昭和47年4月28日(これは、同年9月28日の間違いか……筆者)、同年9月28日、翌48年3月19日に泉中学校で採拓された拓影集成中にある土器と、前掲の沼田報告で紹介された土器である。なお、この沼田報告に図示されているが、現存しない土器については先生の拓影集成より転載させて頂いた。集成にはないが、類似する1点についても掲載した。

第1群 後期末頃のもの (第19図1・2)

1類の波状口縁の深鉢である

1類a (第19図1) 波状口縁部にヘラ状具の抉りで弧線を施し、口縁部の3条の沈線も波頂下で切れている。胎土・焼成とも良好である。色調は外面が濁灰茶色でススが付着し、内面は淡灰褐色を呈する。

1類b (第19図2) 波状口縁の深鉢で、波頂部から口縁部の沈線にむけて2本と3本の沈線を施し、口縁部の沈線は3本の太い短線で切っている。

第2群土器 晩期前葉の八日市新保式のもの (第19図3~22)

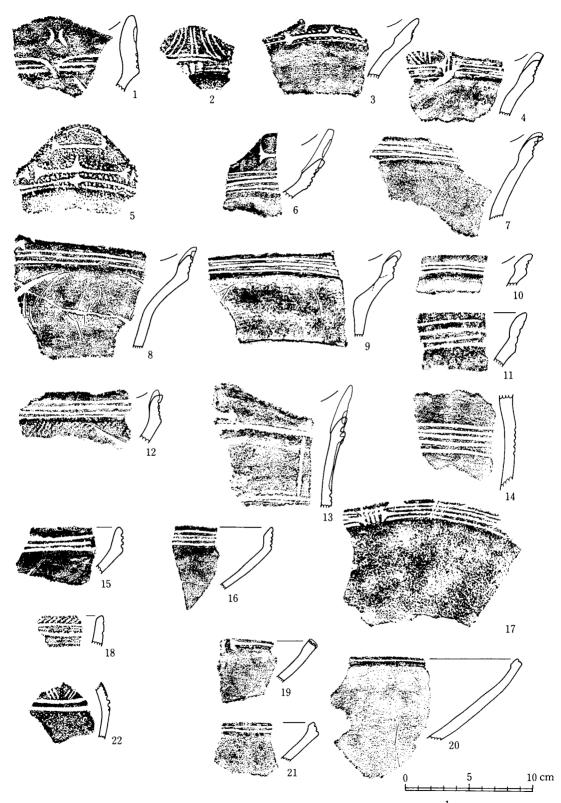
1類 波状口縁の深鉢である

1類a (第19図3・5) 3は口縁部の沈線施文部分にヘラ状具の列点をめぐらした三叉状連結文を、波頂部に連結三叉文?を施したと推定されるもの。胎土・焼成とも良好で、色調は外面が淡茶褐色と暗茶褐色を呈し、ススが付着している。内面は淡褐色・淡茶褐色・灰褐色を呈する。5は波状口縁部に連結三叉文と三叉状連結文を施し、波頂部下の口縁の沈線を菱形に抉り込んでいる。三叉状連結文と口縁部沈線のまわりには列点文を施している。

1類b (第19図4) 4は口縁部に先の尖ったヘラ状のもので連結三叉文を施し、波状部には連結三叉文か三叉状連結文が施され、そのまわりに短線を加えているものである。胎土はやや粗い砂粒を含むが焼成は良好である。色調は外面が濁茶褐色でススが付着し、内面は暗茶褐色を呈する。

1 類 c (第19図6) 6は前者のものと比べると波頂部の形が台形のものである。

1類d (第19図13) これは胴部から口縁部にかけて若干外反ぎみに立ち上り、頸部にくびれが認められない。口縁部の沈線も1本だけと少ない。また、口縁部と胴部文様をつなぐ縦位の沈線が2本垂下している。胎土・焼成とも不良で焼きも甘くもろい。色調も外面が暗茶褐色と濁



第 19 図 \mathbf{F} 犀川鉄橋遺跡出土々器実測図(金沢市立泉中学校保管分)($\mathbf{S} = \frac{1}{3}$)

淡褐色を、内面は黒褐色と淡茶褐色を呈する。内外面とも器面の調整は指ナデ後軽くヘラミガキ を加える程度で、他のものと異なっている。

1類 e (第 19 図 12) これは縄文を施すタイプのもので、頸部に $\mathsf{L}\left\{egin{array}{c}\mathsf{R}\\\mathsf{p}\end{smallmatrix}
ight.$ の縄文を施すもので ある。

1 類 f (第 19 図 7 ~ 11·14) これらは波状口縁の深鉢の口縁部と胴部である。 7 は口縁端 部が外側へ突出している。8は先の尖ったヘラ状具で三叉文が施されている。9は頸部内面が大 きく肥厚し段を形作っている。11は口縁部の幅が他のものより広い。14は胴部文様である。

2類 口縁部が直立する浅鉢

2 類 a (第 19 図 15) 口縁部に 3 条の沈線を施している。

2 類 b (第 19 図 16・17) 口縁部に 4 条の沈線を施している。口縁内面に稜がある。17 も 同様な器形であろう。

2類c (第 19 図 18) 口縁端部にL $\left\{ \begin{smallmatrix} R \\ P \end{smallmatrix} \right\}$ の縄文を施している。

3類 口唇部肥厚の浅鉢

3 類 a (第 19 図 19·20) 19 は縦位の粘土紐と沈線で連結三叉文をもっている。20 は連結 三叉文の連結部か。

3 類 b (第 19 図 21) 口唇部に 2 条の沈線を周らしている。ただこれは 2 類の浅鉢の可能性 もある。

4類 椀形土器と推定されるもの (第19図22) 横位の2条の沈線下に丸い刺突を続けてい る。この上には斜位の短線と丸い刺突を加えている。

第3群 晩期前葉の御経塚式のもの (第20図1~7)

1類 波状口縁乃至平縁の深鉢と推定されるもの (第20図1~3)

1類a (第 20 図1) 波状口縁外面に $L egin{pmatrix} R & (<table-cell> x) \\ R & (細) \end{pmatrix}$ の縄文を施し、内面に幅広の浅い沈線を 周らしている。

1類b (第 20 図 2) 強く外反するが、外面に鋭く深い沈線を施し、内面にも幅広の浅い沈 線を周らしている。

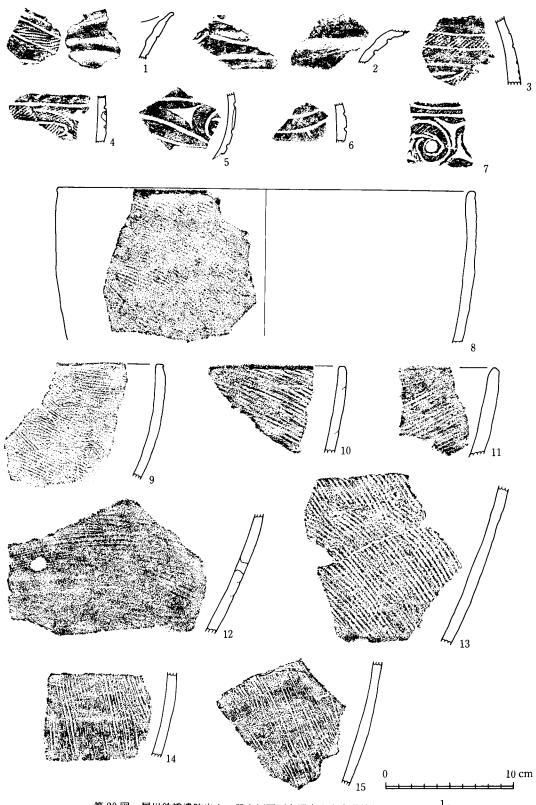
1類 c (第 20 図 3) 深鉢の胴部文様であるが、 L $\left\{ \begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}
ight.$ の縄文帯で区画した中に長楕円形の 沈線を連続させている。

2類 浅鉢形が椀形土器と推定されるもの (第20図4~7)

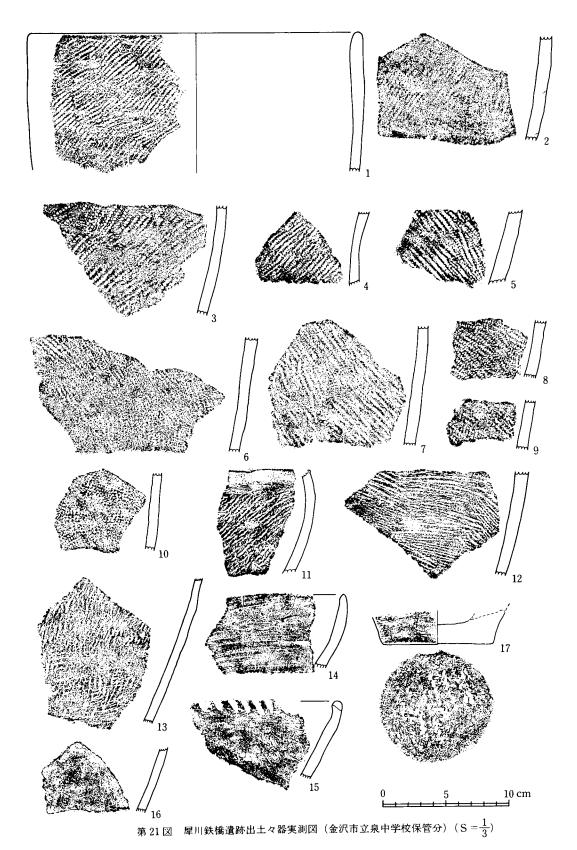
2類 a (第 20 図 4) 平行沈線間に曲線と単独三叉文と $L \left\{ {R \atop R}$ の縄文を施している。

2 類 b (第 20 図 5) 曲線と単独三叉文を施している。外面に L $\left\{ {R \atop R}$ の細かい縄文を施し、 赤色顔料が塗られている。内面は丁寧にミガキを加えている。

2 類 c (第 20 図 6) 曲線と L ${R \atop R}$ の縄文を施している。外面には赤彩されている。 2 類 d (第 20 図 7) 口縁端部の L ${R \atop R}$ の縄文帯で区画し、この中に曲線の L ${R \atop R}$ の縄文帯 が玉を抱き、単独三叉文を交互に施している。



第 20 図 犀川鉄橋遺跡出土々器実測図(金沢市立泉中学校保管分) $S=\frac{1}{3}$)



- 52 -

粗製土器 (第 20 図 8 ~15、第 21 図 1 ~16)

これらの土器には条痕・縄文・無文等のものが存在している。これらのものについては、器形と器面調整のあり方から判断したい。

条痕文を有する土器 (第20図8~15)

1類 口縁部が直立するもので、右下りの条痕文を施すもの(第 20 図 8 ~ $10\cdot13$) 8 は口径が推定33cm の大型の深鉢である。9 の条痕文はやや雑に施されている。10 は 2 ~ 3 単位で条痕調整がなされている。13 は胴部の破片で、3 ~ 5 単位?の条痕調整がなされている。

2類 口縁部がやや外反するもので、左下りの条痕文が施されるもの(第20図11)

3 類 横位の条痕文が施されているもの (第 20 図 12) これは胴部下半の破片で、焼成後に内外面から穿たれた孔がある。横位の条痕もこの孔あたりから上に施され、条痕内に擦痕が残っている。

4類 ササラ状の条痕文が施されるもの(第20図14·15) 両者とも外面に太いものや細い条痕が施されている。15は沼田報告と同拓影集成中には掲載されてはいないが、14と胎土・焼成・色調・器面調整等が極めて類似しているため掲載した。

縄文を有する土器 (第21図1~10・12)

1類 平縁の深鉢で、口縁部が直立するもの(第 $21 \, oximes 1 \, oximes 1 \, oximes 1 \, oximes 2 \, oximes 1 \, oximes 1 \, oximes 2 \, oximes 2$

2 類 外面に R $\binom{L}{L}$ の縄文を施すもの(第 21 図 $5\sim 10\cdot 12$) 縄文も明瞭なものと不明瞭なものが存在する。ただ、12 は R $\binom{1}{l}$ の原体を棒状具に左撚りに巻いたもので縄文を施したものである。

無節縄文を有する土器 (第21図11・13)

無文土器 (第21図14~16)

1 類 (第21 図 14・16) 外反する深鉢でヘラ状具で軽くヘラミガキしている。

2類 (第21図15) 1類と同様なものであるが、口唇部に棒状具で刻みを加えている。

底 部 (第21図17)

底部は1点である。底部と胴部の接合部で破れている。網代は「2本超え2本潜り1本送り」 である。

まとめ

第1群の後期末頃とした1類a(第19図1)は、後期後葉の井口II式の波状口縁部文様から、 波頂部と口縁部文様帯に分離し、波頂部にワンポイントのアクセントの如くx状の弧線を配し、 この下の口縁部文様も弧線状に区切っている。これと類似するものは富山県宇奈月町愛本新遺跡 (註1)から出土し、小島氏はこのタイプの文様を田家型とし、北陸東部の地域性として捉えて いる(註2)。本文の第6図14のものと共にIII期前後の時期に置いておきたい。また、1類b(第 19 図 2)の波頂部から沈線を垂らすものは、波頂部の形態からして八日市新保式に類似している。 しかし、先の沈線のあり方からして小島氏が朝日水源地型(註 3)としたものと近い関係を有し ているともとれ、波頂部に他の文様を施していない点からして八日市新保式まで下げることには 問題があり厳密には、いわゆる井口 II 式一八日市新保式の系統の枠内で捉えることは難しく、こ こではいわゆる、八日市新保式以前として、III 期と考えておきたい。

このIII期としたものについては、以上の文様の系統的な点だけではなく、遺跡の形成がこの時期に始まるということも重要な点である。何故ならば、後期から晩期から継続して営まれる遺跡(例えば本遺跡の上流の金沢市笠舞B遺跡(註4)や野々市町御経塚遺跡等の中核的集落)では後期中葉の酒見式(註5)頃から始まり、III期は遺跡の土器の出土量からして隆盛期にかかっており、忽然として出現する所が問題である。一つの推論であるが、犀川水系のいずれかの遺跡(集落)から新たな地に分離、分村化して来たことも充分に考えられる。

晩期では八日市新保式と御経塚式のものが存在する。八日市新保式の波状口縁の深鉢にしても種々のものが存在する。 1 類 a (第 19 図 3・5)で 3 は、波頂部下の口縁部平行沈線が施される部分に三叉状連結文と列点をめぐらし、波頂部にもこれか連結三叉文のいずれかを施している。 5 は波頂部に連結三叉文と三叉状連結文(縦の軸の短い)を 2 段に施し、口縁部文様としては菱形の抉りを有する沈線と連結三叉文(推定)を施している。この類のものは三叉状連結文の成立過程を考えれば、第 V章まとめの註 13 でも一部触れたが、古い段階のものであろう。同じく 1 類 b (第 19 図 4)は、推定ながら三叉状連結文のまわりに短線を施すタイプのものであろう。 1 類 c (第 19 図 6)のものは波頂部が角ばるタイプのものである。 1 類 d (第 19 図 13)の器形的特徴は、やや外反ぎみに立ち上るもので、頸部にくびれがなく、口縁部と胴部を結ぶ沈線が存在する点も類例がないものである。 1 類 f (第 19 図 9)は頸部内面が肥厚するのが特徴である。 1 類 e (第 19 図 12)は頸部に L { R の縄文を施しているが、口縁部の内屈の度合からして後期末のⅢ期の可能性も考えられるが一応本群に含めた。

以上の深鉢と対応する口縁部の直立する浅鉢(第 19 図 15~18)や、口唇部肥厚の浅鉢(第 19 図 19~21)、椀形と推定される(第 19 図 22)も本時期のものであろう。

御経塚式とされるものも、波状口縁、平縁の深鉢と浅鉢ないし椀形の土器と推定されるものが存在する。波状口縁の深鉢1類a(第 20 図 1)は、外面の口縁部にL ${R(x)\choose R(m)}$ の特徴的な縄文が施されている。本文中でも本型式のものに同様な撚りの原体が見られた。1類b(第 20 図 2)は、口縁部を欠いているため正確な器形は不明であるが、本文中の第IV章の項で説明した第 7 図 9 と胎土・焼成・色調が極めて類似しており、これからすれば平縁の深鉢であるが如何なものであろうか。1類c(第 20 図 3)は深鉢の胴部文様である。推定ながら上下をL ${R\choose R}$ の縄文帯で区画した中に楕円形沈線を施すものである。深鉢の胴部文様帯を縄文帯で区画する手法は、八日市新保式には存在せず、勝木原式から受け継いだもので、これが中屋式へと引き継がれて行くものである。浅鉢乃至椀形のものでは、第 20 図 5 は抉り込みによる三叉文を施し、赤彩されている。ま

た、第20図7は曲線の縄文帯が玉を抱き込む形のもので、その横に三叉文を上下から嚙み合う形で施している。これなども勝木原式との関係を示すものであろう。

条痕文を有する土器、口縁部の形態からしてほぼ直立するタイプのもので、中屋式の如く頸部でくびれてから外反するものは認められない。口唇部もヘラミガキが加えられている。条痕文も左右の下りの他に、刷毛状のものなどが存在する。

無文土器 器面をヘラミガキしたもので、口唇部に棒状具による刻みを加えたものも存在する。以上が泉中学校保管分であるが、第IV章の説明分と合せてみると、第2表のIII期(後期後葉末、八日市新保式直前八日市新保IE型期)から中屋式頃のものが出土している。粗製土器の深鉢では条痕文が多く、次いで縄文(単節、無節)、無文の順である。器形の上からも中屋式まで下るとされるものはほとんどなく、これらの点を踏まえると八日市新保式の時期に遺跡のピークがあり、この時期の一つの様相を示していると考えて大過ないであろう。

- 註1 第V章註11小島論文第3図土器45
- 註2 第V章註11小島論文による。
- 註3 第V章註11小島論文による。
- 註4 石川県立郷土資料館保管分。同館の吉岡康暢資料課長に感謝する。
- 註 5 高堀勝喜 「縄文文化の発展と地域性 北陸」『日本の考古学』II 河出書房新社 昭和 40 年 高堀勝喜 市堀藤夫 「酒見新堂遺跡」 『富来町史 資料編』 富来町 昭和 49 年

高堀勝喜 市堀藤夫 「酒見新堂遺跡」 『富来町史 資料編』 富来町 昭和 49 年 第 2 表 金沢周辺の土器編年案

I	期	井口Ⅱ式 ↓	
II	期	+ ↓	
III	期	(田家型) (朝日水源地型) + (八日市新保IE型)	
		───────────────────────────────	
IV	期	↓ 勝木原式 = 八日市新保式	大洞 B 式
v	期	御経嫁式	 大洞B-C式
*	701		
VI	期	中屋式 ↓	大洞B-C式 大洞 C ₁ 式
VII	期	+	
		←は系統・=は併行関係	

付章 II 周辺の遺跡① 増泉穴田遺跡採集土器について

遺跡の位置 増泉穴田遺跡は、金沢市増泉町の南西端にあたり、糸田・西泉町の境界辺に接しており、一部泉本町にまたがって所在している。ちなみに、本書の犀川鉄橋遺跡から南南西約1.5kmの距離である。当遺跡は、当初増泉排水路遺跡の名称で、石川県教育委員会が昭和55年3月に刊行した『石川県遺跡地図』に、遺跡番号1402として登載されていたもので、当遺跡付近を地元の人達は通称(穴田のガラ)と呼んでいるので、このたびの資料紹介の機会に改称させて頂だくことにした。

増泉穴田遺跡は、白山を源流とする手取川が形成した手取川扇状地の扇端部にあり、また北東約1.5kmの向うに流れている犀川の冲積作用によってできた扇状地で、標高約10mを測り、微高地上に位置している。手取・犀川両河川のたびたびの氾濫により形成された自然湧水地帯である。両扇状地の縫合部を伏見川が遺跡より南西約500m向うに流れるが、下流約2.5kmの所で犀川と合流し、日本海へ注ぐ。

発見の経緯 本遺跡の発見は約10年前、㈱大久保製作所または東隣の増皐荘の土留め工事中に、土砂に混って土器が発見された。たまたま工事現場に居合わせた、米沢義直氏(石川考古学研究会員)が遺物を採集され、関係機関へ発見届を出されたものである。本年2月23日、県立埋文センター米沢主事と筆者が遺跡確認のため、実地踏査した折、畑地・畦畔に数点の土器片と、1点の青磁片を表採している。現在同地域は宅地化が進み、市街地化している場所での遺物散布を実見して、瞠目する思いがした。

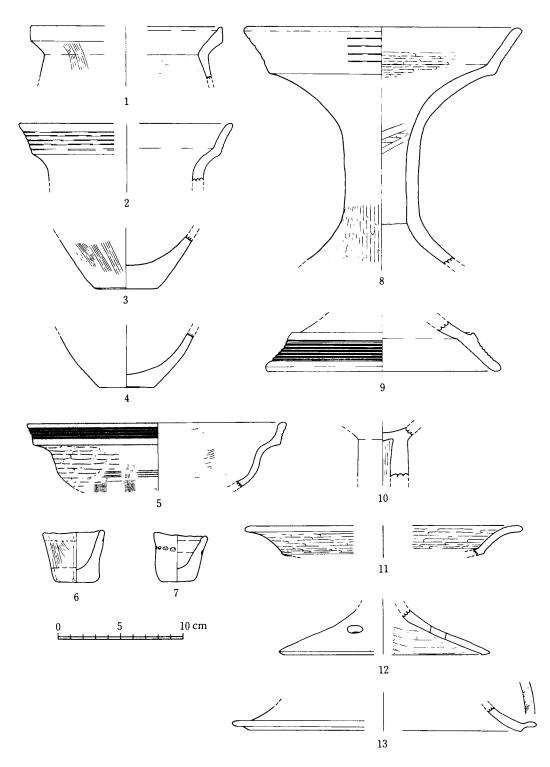
遺物の観察 (図示した 1~13 の土器は排水路改修工事中に採集された土器である)

1は口縁先端に 1.2 cm の幅をもたせ、平直に立ち上がり、あまり肩の張らない甕であろう。色調は外面が濁灰褐色で、内面は濁灰褐色より少し赤褐色気味である。胎土には中位砂粒をやや多量に含有し、焼成はややあまい。器表は口縁先端以下を粗いハケあるいは、クシ状具などで整えている。内面は口縁をヨコナデ、頸部以下をヘラケズリ調整している。器表面に鉄分の付着が認められ、少し器面が剝離している。

2は口縁部で屈折し、外反する。有段口縁の壺形土器で、口縁帯に5条の擬凹線をめぐらしているが、磨滅のためにわずかにみえる。色調は内外共に濁乳橙色を呈す。胎土には粗砂粒を多量に含有し、粗質である。焼成はやや良好、調整は磨滅が著しいため、内外共に不明、口縁内面に 黒斑がみられる。

3は底径 5 cm の甕底部であろう。色調は外面淡乳灰褐色、内面は黄橙色を呈し、胎土には粗砂粒を多量に含有する。焼成は良好で、外面はハケナデ調整している。

4 も甕底部であろうか。底径 4.3 cm を測る。色調は外面濁茶褐色、内面灰褐色~淡赤灰褐色を呈している。胎土は粗砂粒を多量に含み粗質であるが、焼成は堅く良好。外面は強いハケまたは弱いクシ状具でのナデがかすかにみられるが磨滅のため、不明瞭である。内面はヘラケズリで器



第 22 図 増泉穴田遺跡出土々器実測図($S=\frac{1}{3}$)

肉の厚さを整えている。

5は口径 20.7 cm の鉢形土器である。口縁がやや外反、端部が丸くおさめられる。口縁帯に 4 条の擬凹線が施されている。口縁以下はやや雑なヘラミガキ調整のため、成形時のクシケズリ痕 が顕著にみられる。内面はヘラケズリ後、ヨコナデしている。色調は外面濁灰橙色で、内面は濁 灰色を呈す。器表面には赤彩の痕跡がわずかに残存するが、従来は全面に塗彩されていたものだ ろう。胎土は中位砂粒を若干含み精選土で、焼成は良好で堅く焼きしまっている。

6・7は小型手捏土器である。6は口径4.9 cm、器高4.2 cm、底径3.5 cm を測る。外面の色調は淡灰褐色~淡暗褐色で、内面灰褐色を呈す。胎土には中位砂粒をやや多量に含み、焼成は堅く良好である。手捏ねた後、粗略な削りか、あるいは叩押えて成形したのか二通り考えられるが、判然としない。その後で上部から下部へハケナデ調整する。体部と底部の境が弱くくびれる。外面口縁端部直下に先の尖った施文具で周囲4分の1(約4 cm)程度を刺突加飾する。内面はヨコナデている。内・外面に黒斑がみられる。

7は口径 4.2 cm、器高 3.7 cm、底径 2.2 cm を測る。6よりはやや小ぶりなミニチュア土器である。色調は内・外面共に黒褐色を呈している。胎土には細砂粒を少量混入する。焼成は堅く焼きしまって良好である。外面体部上に茎の先端部の様な施文具で周囲約 4 分の 1 程度刺突加飾している。6 の土器同様に粗略に削るか、あるいは叩押えの痕がみえる。不定方向のクシケズリ痕が顕著に部分的にみられる。口縁先端部が折りまげられて内面肥厚している。巻き上げ痕がみられ、雑にナデ押えている。

8・9は器台形の器受部と脚部で同一個体の可能性が考えられるが、一応分離した。8は棒状の円筒より、なだらかに立ち上がり外反し、屈曲して口縁部へ移行する有段口縁で、口径22.3 cmを測る。色調外面は淡乳桃色、内面は淡乳桃色~濁灰褐色を呈している。胎土には粗砂粒をやや多量に含有し、焼成は少しあまい。やや外反する口縁帯に4条の擬凹線文が施されているが、磨耗が著しいためわずかに残存する。脚部へはゆっくり拡がり、丁寧にヘラミガキしている。内面器受部は丹念にヘフミガキ調整し、筒部はヘラケズリしている。

9は底径 18.7 cm の有段状の脚受部外面に 7条の擬凹線が施文されている。内面は磨耗のため 調整不明である。色調は内外共に淡乳桃色を呈する。胎土は中位砂粒をやや多量に含む、焼成は 普通である。

10 は高坏の脚部である。脚筒径 4 cm で、色調外面は濁乳桃色、内面灰褐色を呈する。胎土には細砂粒をやや多量に含有し、焼成は良好で堅く焼かれている。調整は坏部内面にヘラミガキしている。脚部内面にしばり目がみられる。

11 は器台、または高坏の坏部であろう。色調は外面濁灰褐色、内面は淡灰褐色で、胎土は粗砂粒を若干含み、焼成も堅緻で共に良好である。坏底部より稜をなして口縁部へ大きく外反する。調整は内・外面共に入念なヘラミガキで整えている。

12 は裾で大きく開く高坏もしくは器台の脚裾部であろう。色調は外面淡乳桃色で、内面乳赤灰

色を呈している。胎土は細砂粒を若干含み精良であり、焼成は堅緻で良好である。外面は丁寧な ヘラミガキ、内面はハケナデ調整している。透し穴は3孔を穿つと思われる。内面に黒斑がみら れる。

13 は 12 同様、高坏もしくは器台の脚裾部であろう。横上方に反り上がる端面にはクシ状具で綾 杉文を飾っている。色調は外面淡灰黒色、内面は濁乳灰色を呈し、胎土には中位砂粒を含み、焼 成は少しあまい。以上図示した 1 ~13 の土器の観察を簡単に付記した。

若干の考察 口縁先端を平直に立ち上がる甕1、有段口縁がゆるやかに外反する壺2、しっかりした平底の底部3・4、脚台部を有段とし、擬凹線で飾る8・9、脚台端部を複合状に反転肥厚するタイプの13などにみうけられる特徴的形態は、金沢市塚崎遺跡で発掘された台地南端に所在する半環状溝遺構出土の土器群と近似していることから、当土器群は塚崎I式期に比定され、畿内V様式末併行期の所産と考えられよう。県内でのこの時期の資料は、加賀市猫橋遺跡、松任市法仏遺跡、羽咋市柳田うわの遺跡、羽咋市吉崎・次場遺跡、鹿島町徳前C遺跡、七尾市奥原遺(3))跡などが知られている。

小型手捏土器が2点採集されている。小型手捏土器(祭祀遺物)と特殊ピットの関連が数例しられている。昭和53年度に発掘調査された、加賀市小菅波遺跡C地区第1号住居址、金沢市塚崎遺跡第3号住居址、津幡町谷内石山遺跡第2号住居址などで、何れも特殊ピット内か、あるいは付近のピット内から検出されている事は注目すべきである。なお鳥取県青木遺跡では、若干の検出遺物から推定し、「祭祀関係址」として報告している。また長野県岡谷市橋原遺跡での試論によると、橋原遺跡における弥生式土器を四細分析し、橋原Ⅰ式は従来の岡ノ屋式に相当し、最末のIV式は古式土師器としており、各期の小型手捏土器の変遷から、Ⅰ期からIII期までは、各家において小型手捏土器を用いての祭祀、つまり各家毎の祭祀がおこなわれていた。 それがIV期にいたるとある特定の家にその祭祀が集中していくと考察されている。さらに今後の資料増加を待って検討されよう。さて弥生末から月影期の中で、県内での小型手捏土器の出土例は、加賀市小菅波遺跡、小松市漆町遺跡、同高堂遺跡、金沢市西念・南新保遺跡、同塚崎遺跡、津幡町谷内石山遺跡、内灘町粟崎採集品、鹿島町徳前C遺跡、七尾市奥原遺跡などから検出されている。

末筆ながら本文の作成にあたり、埋文センター職員はもとより、米沢義直氏・湯尻修平氏・ 宮本哲郎氏の方々から有益な御指導と御教示を賜った。ここに厚く感謝を表したい。

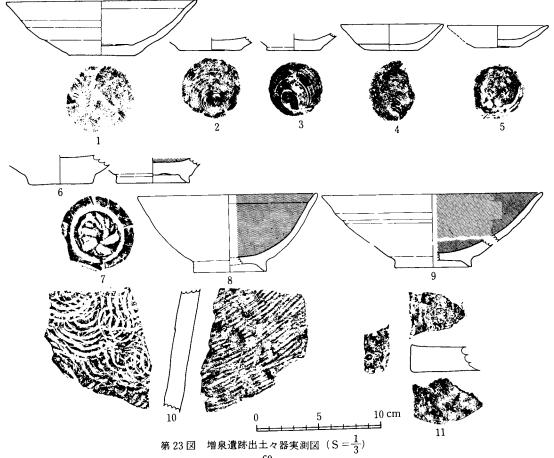
註

- 1) 吉岡・小島他「塚崎遺跡」『北陸自動車関係埋蔵文化財調査報告書II』石川県教育委員会(昭和 51 年)
- 2) 北陸大谷高等学校地歴クラブ『紀要第2号』(昭和42年)
- 3) 谷内尾晋司 石川考古学研究会古墳部会 第2回例会資料(昭和55年)
- 4) 谷内尾晋司「柳田うわの遺跡」 『羽咋市史・原始古代編』 (昭和 48年)
- 5) 橋本澄夫「羽咋市吉崎・次場遺跡」『羽咋市史・原始古代編』(昭和 48 年)
- 6) 湯尻修平『鹿島町徳前C遺跡調査報告 I』石川県教育委員会(昭和53年)
- 7) 昭和57年3月刊行予定

- 8) 小菅波遺跡 C 地区第 1 号住居址南壁中央に接して、構築された方形二段の特殊ピット $(方形 160 \times 160 7 \, \mathrm{cm} \, \sigma)$ 内部に不整円形ピット 120×100-67 cm) を検出した。 床面より約 7 cm 下のテラス状くぼみに小礫を敷き詰め た部分が三ケ所あり、その面よりミニチュア小壺 2点、蓋 1点がセットで検出された。三浦純夫氏より、未報 告だが検出時の状況について懇切に御教示を受けた。
- 9) 西野秀和・滋井真『津幡町谷内石山遺跡発掘調査報告書』津幡町教育委員会(昭和55年)
- 10) 船越元四郎・諸田良他『青木遺跡発掘調査報告書III』鳥取県教育委員会(昭和 53 年)
- 11) 鏡・滑石勾玉・小形丸底壺・手づくね土器など。
- 12) 宮坂光昭「弥生末期にみる祭祀形態試論」『信濃』第34巻、第4号 (昭和57年)
- 13) 諏訪地方の弥生後期土器型式
- 14) 第3次発掘調査の遺物中に粗製小形土器が存在している。
- 15) 第1次発掘調査、H-38区大溝遺構、溝底より検出される。
- 16) 昭和 55・56 年度発掘調査の遺物中に数点混在している。遺構との関連は、現在整理途中のため詳かではない。
- 17) 高堀勝喜・橋本澄夫「内灘砂丘出土の遺物」『内灘町史』(昭和 57 年)

周辺の遺跡② 増泉遺跡

昭和 46 年に県道野田専光寺線の改良工事に伴って遺物が発見され、一部トレンチ調査を実施し ている。今回、紹介する遺物もその際に検出したものである。金沢市増泉1丁目地内に所在する が、現在市街地が甚しく旧地形等は判然としないし、また立ち合い調査であり、内容については



-60 -

不明の点が多い。当時の所見では、道路沿いに東西約50 cm ばかりの包含層が認められた。南北の拡がりは不明であるが、かなりの規模を有していたものと思われる。本遺跡は犀川の左岸にあたり扇状地端に立地するものと思われる。現犀川より南約300 mの地点である。その際に出土した遺物には須恵器・土師器・瓦片などがあるが、いずれも細片が多く図化可能なものについてのみ紹介することにする。

1 土師器 坏と高台付坏の二種が存する。

坏 (第23図1~5)

全形を知り得るものは1の1点のみであとは底部片である。底部には明瞭に糸切り痕を残す。 器外面は全面にヨコナデ(ササラ状工具?)調整である。内面も同巧の手法によると思われるが、 やや外面の調整よりは丁寧である。口径14.5 cm、底径5.4 cm、器高4.5 cm を測る。通有の器形 であるが、器中位でやや外傾を変え口縁にいたるものである。2、3も同様な坏とみられる。他 に小形の坏と思われるものが2点存する。4は底径5.0 cm、口径7.8 cm、器高2 cm を測り、5 は底径5.4 cm、口径8 cm、器高1.8 cm を測り調整手法は先述の坏と同巧である。いずれも糸切り痕を残す。

坏 (高台を有するもの) (第23図7~9)

いずれも内面黒色土器である。7は底部のみの破片であるが、底部には箆先による掻きとり、高台を貼り付周縁に指頭によるナデを施している。内外面ともに箆磨きを施しているようであるが判然とはしない。底径5.8 cm を測る。8は口径14.2 cm、底径6 cm、器高6.2 cm を測る。梳状に近い半球形の坏部に断面三角形の高台を貼り付けたものである。外面の調整は器表剝離のため観察できないが、内面の口縁近くは刷毛状具によるヨコナデ、見込みにかけては、ヨコナデののち不特定方向のナデつけが施されている。9は口径17.4 cm、底径5.2 cm、器高5.8 cm に復元できるものと思われ、調整手法については8に似る。

2 須恵器 (第23図 10)

いずれも破片のために全形を知る得るものはなく、10 は甕の胴部片で内面には同心円状のタタキ、外面には条線状のタタキを施す通有のものである。他には、坏と推定されるもの一点が存するのみである。

3 瓦 (第23図11)

厚さ 2.1 cm、平面形 3.5×5 cm を測る小片であり、焼成は瓦質に近く器肉は灰褐色、器表は黒褐色を呈する。表面の整形等については細片のため知ることはできない。

以上、図示可能なものについてのみ、その特徴等について概観してきたのであるが、これら遺物の所属する時期についてはどうであろうか。調査時の状況についても今一つ判然としないが、坏底部にはいずれも糸切痕を有すること。また境形を呈する坏身に高台(貼り付高台)を有するものがあり、さらに坏内面の黒色のものなどが存在することから三浦上層期に近似する時期を与えておきたい。11 の瓦については瓦質に近く中世にまで下るものであるかもしれない。



犀川鉄橋全景(大豆田大橋上より)



土層堆積状況





第1次調查風景



第2次調査地 (上流から下流へ)



第2次調査地 (下流から上流へ)



第2次調查風景



上師器 (高坏・甕) 出土状況



土師器 (丸底・高坏)・木製品出土状況



木製品出土状況



上師器(坏)出土状況



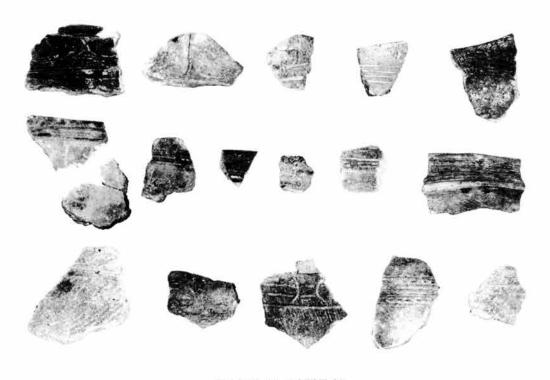
土師器 (坏)·須恵器 (坏) 出土状况



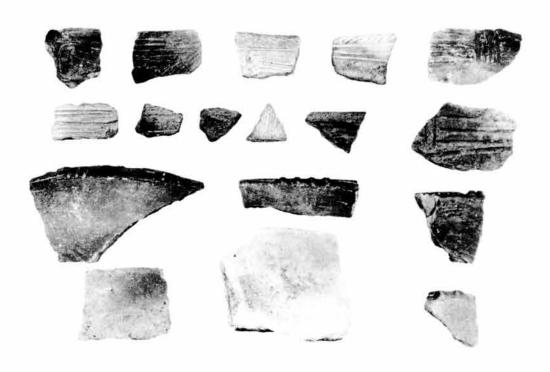
土師器 (甕) 出土状況



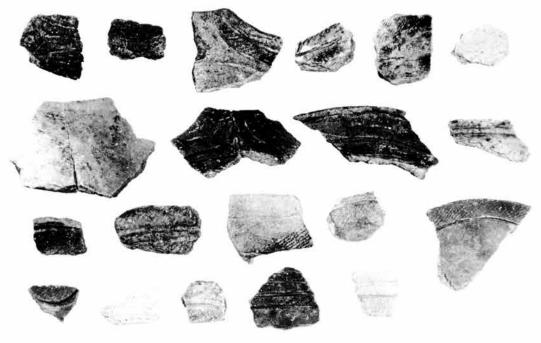
繩文土器・石器・自然遺物出土状況



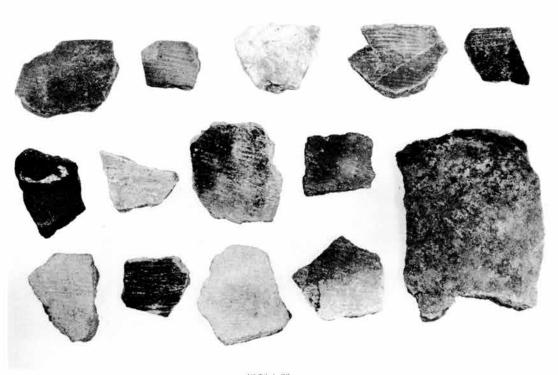
出土土器 (八日市新保式)



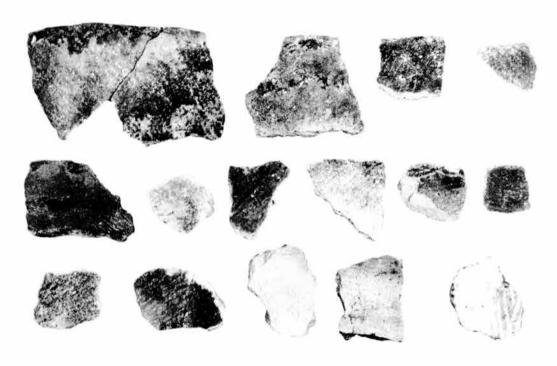
出土土器 (八日市新保式)



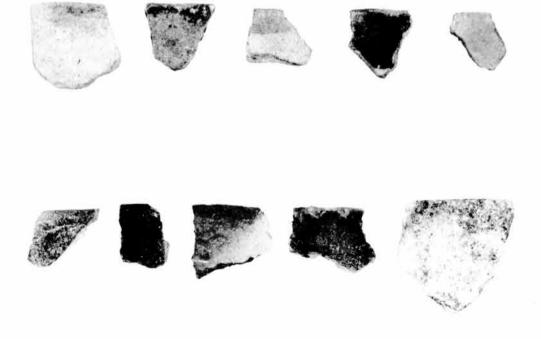
出土土器 (御経塚式)



粗製土器



粗製土器



粗製土器

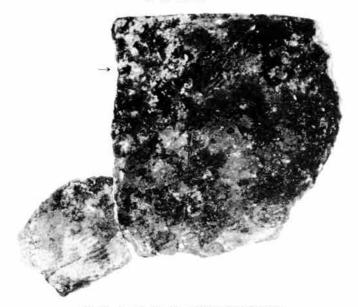


出土土器 (中屋式)

9



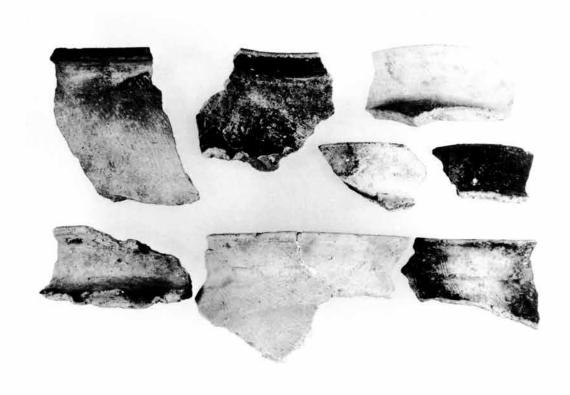
粗製土器



粗 製 土 器 (矢印 補修孔内の補修紐)

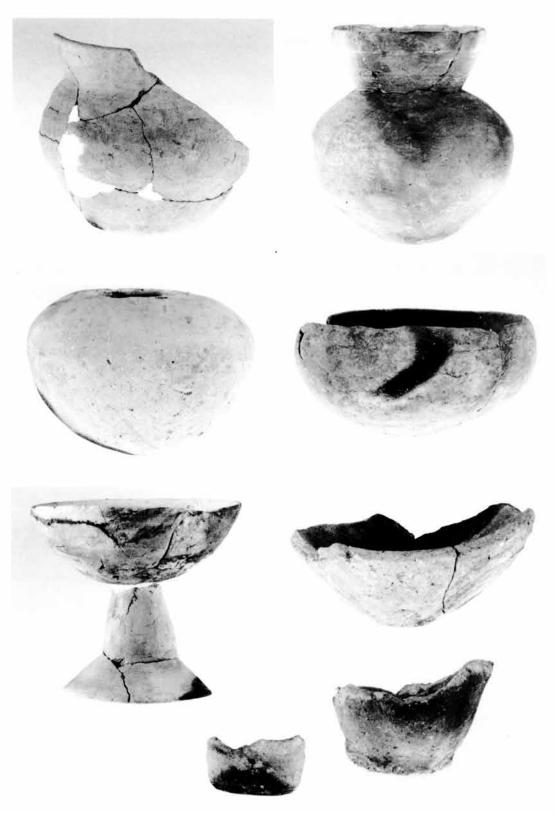


補修紐拡大





土師器 (甕・高坏)

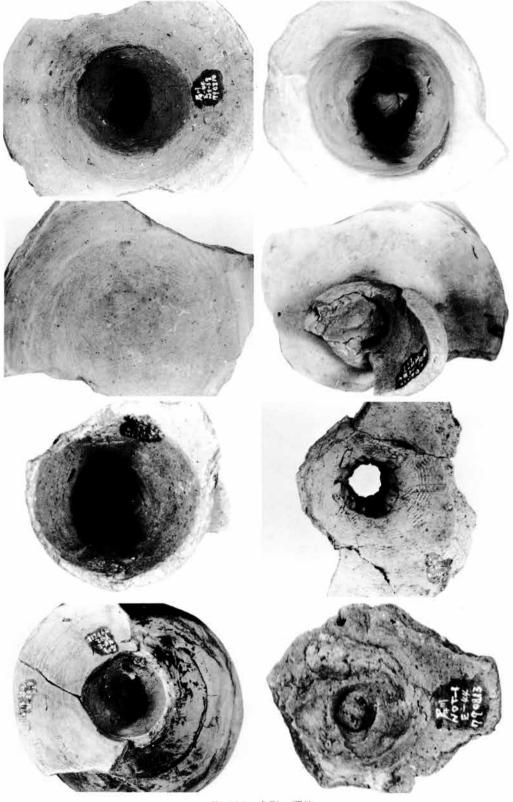


土師器 (甕、壺、坏、高坏、底部)

版

図

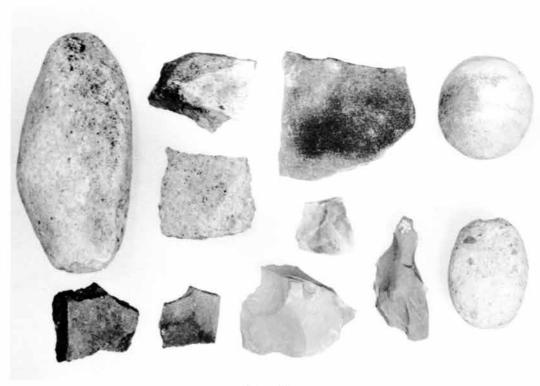
12



脚・坏の成形・調整



土師器饗底部·須 恵 器



石 器

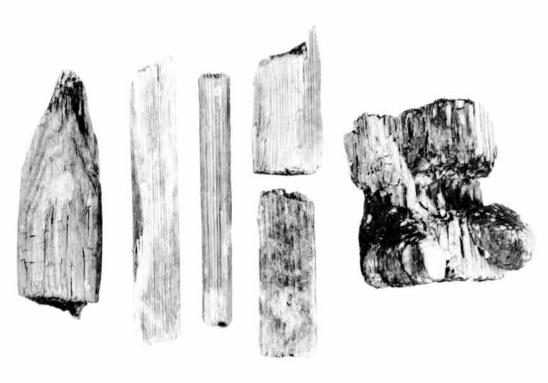


擦り切り石器刃部

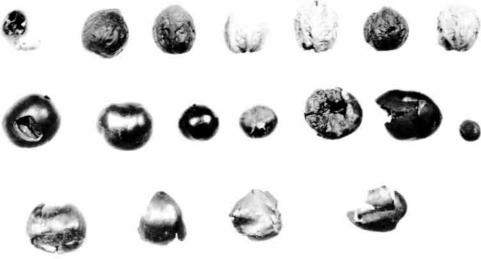
図



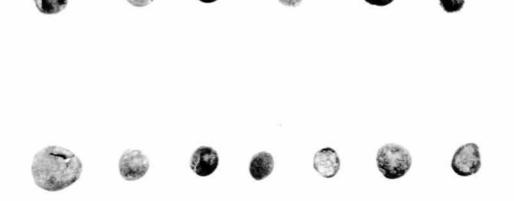
木 製 品



木 製 品

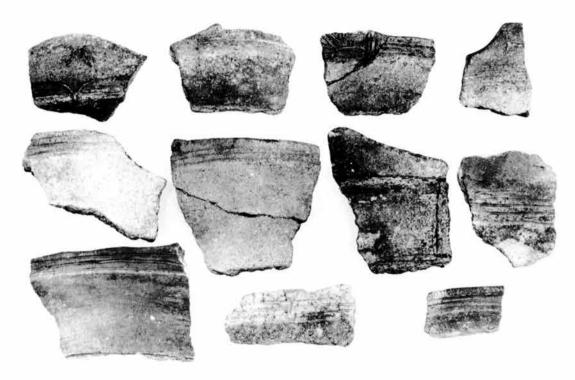


自然遺物(上段 胡桃、中段 栃、下段 栗)



自然遺物

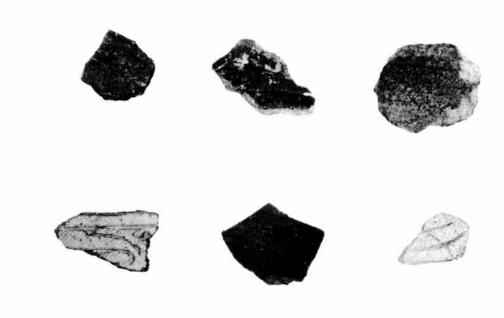




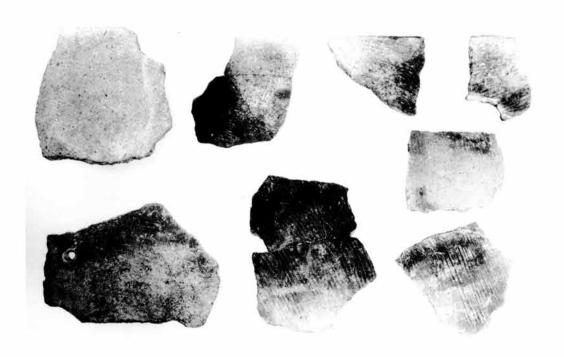
泉中学校保管土器 (八日市新保式)



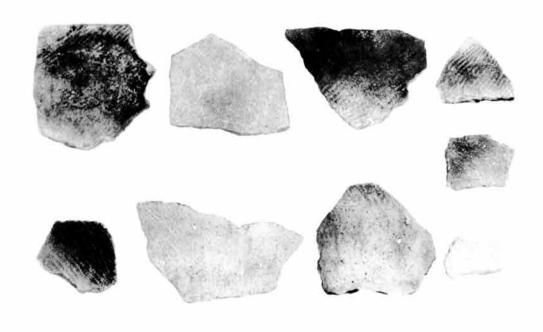
泉中学校保管土器 (八日市新保式)



泉中学校保管土器(御経塚式)



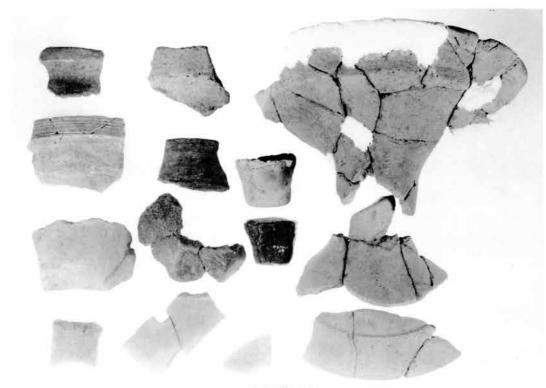
泉中学校保管土器(粗製土器)



泉中学校保管土器(粗製土器)



泉中学校保管土器 (粗製土器)



增泉穴田遺跡採集土器



增泉遺跡出土土器

金沢市犀川鉄橋遺跡第1·2次発掘調査報告書

一犀川環境整備事業関係埋蔵文化財調査報告書第1集—

印 刷 日 昭和57年3月20日

発 行 日 昭和57年3月25日 編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

印 刷 橋本確文堂